5861
2144
no.12

JUNIO 1922

:LA SEMANTO:

種蒔く人

行動と批判

第二年 第二巻 第九號

大正十年十二月一日 第三種郵便物認可
大正十一年五月廿八日 印刷納本
大正十一年六月一日發行（毎月一回一日發行）

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

◦六月號◦

種蒔き社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

NIA DEKLARO

Iam antaŭe homoj kreis diojn. Sed homoj nun estas ilin mortigintaj. La destino de l'kreitaĵoj estas facile divenebla.

Nuntempe ne sintrovas dioj. Tamen ĉie aliformigaĵoj de dioj estas plenaj. Dioj devas esti mortigataj. Kiuj ilin mortigas, estas ni; kaj kiuj ilin aprobas, estas la malamikoj. Du kampadejoj kontraŭstaras unu la alian. Dum ĉitiu stato daŭradas, homoj estas malamikoj de homoj. Neniam estas inter ili la vojo de kompromiso; tie nur estas „jes" aŭ „ne," „vero" aŭ „malvero."

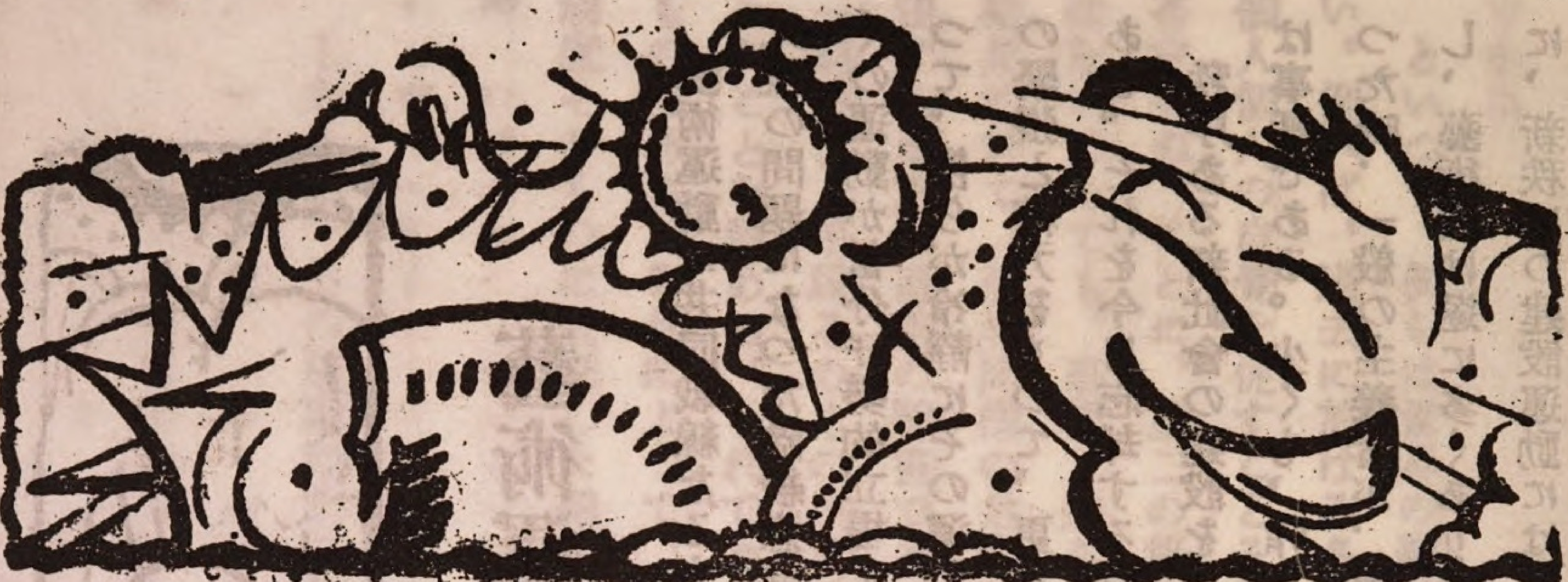
Vero estas absoluta. Ni do diras pri la Vero, kiun aliuloj ne diras. Homoj estas lupoj kontraŭ homoj. Landoj aŭ rasoj estas en nenia rilato por ili. Sub la lumo de Vero okazas unuiĝo kaj apartiĝo.

[illegible] —kune kun la kamaradoj en la tuta mondo!

La Semanto. (*TANEMAKIŜA*)

種蒔く人六月號目次

メーデーの敎訓(題言)
藝術運動に於ける共同戰線(社論)……平林初之輔
文藝運動と勞働運動(評論)……平林初之輔
廢兵をのせた赤電車(小說)……金子洋文
恐怖の片影(童話詩)……佐々木孝丸
歸村せる暑長(小說)……飯田德太郎
路傍の男(小說)……今野賢三
ブルジュア文藝の不倒子を突倒す(評論)……津田光造
アテイストの獨考(評論)……佐々木孝丸
シベリア通信
「未明」管見(評論)……逸平老史
大阪と神戸の講演會
□批評——青年將校の見たる西伯利亞出征軍の實狀(小牧)平林氏「最後の幻覺」(日之樹)武林氏の近作二篇(弘二)「嵐」を評す(弘二)映畫「默示錄の四騎士」(小牧、洋文、淳三)
□世界——罪の償ひ——支那を見習へ!——第三回敎員組合全露大會——某家秘藏美術品入札——國際的道具集め週間
□地方欄——足尾のメーデー——異端座主催「種蒔く人」講演會を觀て
□社會主義講座　□エスペラント講座　□聾人
表紙繪及カツト……柳瀨正夢



メーデーの教訓

メーデーはプロレタリヤの威力を示すべき日であつた。併し東京のメーデーはプロレタリヤの威力を示すかはりに官憲の威力を示した。勞働者の示威運動といふよりも警官の示威運動に終つた。

勞働者には組織がなかつた。警察には組織があつた。吾等には團結と訓練がなかつた。彼等には團結と訓練があつた。吾等はたゞ歌を歌つて歩いた。彼等は眼ぼしい連中を前夜の中に或は寢込みに襲ひ、行列の中から百餘名の檢束者をひき拔いた。

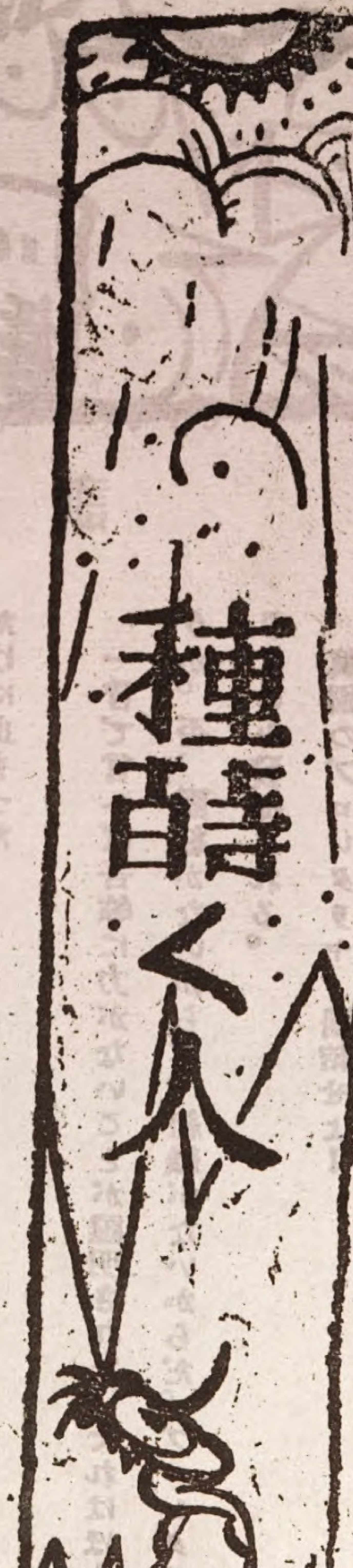
勞働者には戰術がなかつた。資本家には戰術があつた。工場主は勞働者をメーデーに參加させないために凡ゆる手段をとつた。或は遠足につれ出したり、次の二日を休業させたりした。勞働者には何の對抗策もとれなかつた。

メーデーの演說者は皆、もはや議論の時代でなく實行の時代であると叫んだ。併し何等の實行も準備されてゐなかつた。メーデーの決議は一日きりで滿期の古證文となつた。決議が容れられなかつた場合の對抗手段は何等講じられてゐなかつた。決議の文句はたゞ芝浦の空氣を少し震動させるだけに止まつた。

一言で言へば吾等に力がないことが證明された。それはほんとうにプロレタリヤが無力なのだらうか。否、團結がないからだ。組織がないからだ。プロレタリヤの威力は、たゞ團結と組織とによりてのみ發揮される。

萬國のプロレタリヤ、團結せよ」

東167812
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



藝術運動に於ける共同戰線

藝術運動に共同戰線なるものがあるか。僕らは思ふ。明かにある。そして、また、なければならない。現に最近日本の文壇の問題になつた階級意識の主張は觀方によつては明かに期せずして一致した共同戰線の運用であつた。おそらく、多くの運動が當分守勢的立場にあるなかに、最近の藝術運動ほど、ともかくも攻勢的態度を示めしてゐるものがない。といつて、僕らが冷靜にその運動の今日までの効果を考へる時、まだまだ、かりそめにも樂觀を許されない。否々、より以上の緊張と精力をもつて、更らに更らに反逆精神と階級鬪爭の眼覺めを深刻に、且つ、普遍的にしなければならない時代にある。それを今日忘却する時は、常に不安と絶望の眼をもつて報ひられた藝術運動の幻滅を告白することになる。

秩序ある新社會の建設を目的とするための藝術運動は本質的にどれだけ有効なものであるか、隨分危ぶまれて來たことは事實である。少くも、昨日のやうに、藝術家であるがために、あまりに個人的ファンテイジイに流れたやうな傾向のあつた時、一般の主義者が、藝術運動に對して、悲觀の嘆聲をもらしたことは、むしろ當然なことであつたと云へる。しかし、藝術家は遂に多くありふれた藝術家であるために、そして、また、それ以上に實際運動に出來得ないとの斷定のもとに、新秩序の建設運動には當低大なる役割を期待することが出來ぬといふ一部の批難に對して、僕たちは何等の抗議なしに居るわけには行かない。僕らは如何に藝術家の運動が頼み甲斐のないものに見做されやうとも、之を總攻勢の一部隊と

して見るとき、自覺せる藝術家の動員は共同戰線といふ作戰上の見地からして、必ずしも無效なものでないと信ずるからである。

といつて、僕らは世界の藝術家たちの無關心に近かつた過去の態度に對してまでも必ずしも執拗に抗辯するものではない。例へば、過去に於ける多くの藝術家は藝術家の世界のみに生きやうとして來たことや、また、藝術家の唯一の使命は個人個人の自覺を促すことそれであるとのみ思つて來たことなどはその最も批難の的になつたところのものであることを否定せぬ。ことに、第二の場合、即ち個人の開發そのものにあまりに期待を持つといふことは、その人自身がそれ程に思はないでゐても、事實、知らず知らずの間に、ブルジョアジイの最も得意とするありふれた武器――レオルミズムの辯と結果に於て、全然同様の危險におちいる恐れがある。このいはゆるオポルチユニズムこそ、確かに、共産主義者たちの主張する運動の直接の障害であつたに相違ない。

「窮極より手段そのものが貴重である」とはロマン・ロオランの對アンリ・バルビユス第一公開書の一句であるが、僕らはそのことを認める。それであるがために、僕らは貴重なる手段として、何よりも先づ一日も早き現制度の倒壊を主張するものである。それによつて、初めて個人の完全なる自覺を得ることが出來るであらう。與へられたる社會、與へられたる制度そのものに成長した個人が、[redacted]

しからば、その破壊のために藝術家は何を爲すべきや藝術家の[redacted]藝術家の第二の任務は、ブルジョアジイの代辯者であるところのブルジョア藝術家を葬ることである。プロレタリア藝術家の第三の任務は、プロレタリア藝術の右傾分

子――ブルジョア・パシフィスト、リベラリストなど――の假面を剝ぐことである。そして、これらの任務を遂行するためには[redacted]そして、それがためには、個人個人の氣紛な單獨行爲や、また、藝術家であるがためのファンテジイが許されなくなる。ここに於て初めて、藝術運動にも社會主義運動と同樣に、組織ある共同戰線の必用がなくてならぬものとなり、やがて、それが更らに社會運動と戰線をともにするために、より大なる輪廓を有する共同戰線を形成しなければならぬ必然に到着する。

以上の事實から見て、最近ロマン・ロオランとアンリ・バルビュスとの間に取交はされたポレミツクは、共同戰線の今や實質的に効果をなけやうとして今日の場合に於て眞に悲しい現象であると思ふ。そして、その場合を今日の如き日本の現狀に於て想像する時、僕らは例へ日本に於ても早晩惹起す可き問題にもせよ、今日自由と平等の論爭をなすことは頗る危險なことだと思ふ。現に僕らの今日爲してゐる第四階級の運動も他の國のそれに比してまだまだブルジョア思想には充分に肉薄してゐない。自由と平等はある形式になつて早晩分離するものであるかも知れない。しかし、その論戰をなすためのほんとうの資格を得るために、先づもつて、今日一日も早きあるものゝ出現のための追擊しつつある第四階級運動のための共同戰線の實を今少しく擧げやう。

文藝運動と勞働運動

平林初之輔

一

明治以來の文藝運動は流派（スクール）と流派との間の運動であつた。それは單に個々人の性質、趣味、河上博士の所謂「型」（改造五月號參照）によつて相集る群（グループ）と群との爭ひであつた。論爭點は主として描寫の樣式、文體、せい〴〵のところで藝術價値の見方、人生觀の相違にとゞまつた。

最近に起らんとしてゐる階級藝術の運動は、少くもその本質に於ては階級鬪爭の一現象、階級鬪爭の局部戰、階級戰線の一部面に於ける爭鬪でなければならぬ。從つてこれは單なる文學運動、紙上の運動としては解決の見込みがない。階級戰の主力なるブルジョアとプロレタリヤの決勝によりてのみ解決されるものである。

かくの如く文藝運動の意味を局限することは文學者にとりては不滿であるかも知れない。文藝に一生を捧げてゐる人達にとつては文藝運動は一切であり、絕對であつて、階級鬪爭の一小部分の戰線を分担するといふだけに止まらぬといふ人があるかも知れない。然しながらさういふ人々は階級藝術の意義を遂に理會し得ず、調子に浮かされて吾知らずその運動の中へ飛びこんでゐる周章者に他ならぬのだ。さういふ人々は今の內に、けちくさい、あまり見榮へもしない階級戰の隅つこの方に陣どる代りに、「階級」といふやうな窮屈な鎖はかなぐりすてゝ、藝術そのものゝ晴れの舞臺へ出づべきだ。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

如何なる運動にも不純分子が集る如く、階級藝術の運動にも不純分子が寄つてたかつてそれを利用し、くひものにしやうとする。階級文藝の旗じるしの下にかくれてこそ泥をはだらかうとする者がある。かくてはじめの中は階級藝術の問題は無名作家と流行作家との爭ひのやうに見られてゐた。土田杏村氏が『新潮』二月號に書かれた議論の如きはそれである。實際、社會主義運動の中に、働くことのきらいなごろつきや食ひたほしやがまじりこむと同じやうに、階級藝術運動の中にも、文藝のいろはもわきまへない連中が、糞眞面目な月給取商賣はいやだからといふので、あはよくば流行作家になりすまさうといふどえらい野心を抱いて飛びこんだもの丶あつたことは事實である。プロレタリヤの運動としての文藝運動はまづかういふ人々の蟲のよい野心に對して答ふるところがなければならぬ。プロレタリヤの文藝運動は流行作家の惡口をいふ運動でもなければ、新進無名作家を引きたてたり擁護したりする運動でもない。無名と有名、流行と非流行とは問ふところでない。それは階級戰である。

次にプロレタリヤの文藝運動は文藝運動であるよりも先づプロレタリヤの運動であることを念頭にをかねばならぬ。だからその綱領は文藝上の綱領ではなくて、プロレタリヤそのもの丶綱領でなければならぬ。プロレタリヤの解放――それがプロレタリヤ文藝運動の唯一の綱領である。それ以外のものを求めるものもまたプロレタリヤ文藝運動の陣營を去つて『階級』の『上』に赴くべきだ。文藝の爭ひの奥に階級の爭ひを認むるもの丶み、影法師のうしろに實體を、枝葉の下に根幹を認むるもの丶みが階級藝術運動の戰士となり得るのである。

階級鬪爭の決勝戰はたゞ本隊の衝突によりてのみ決せられる。文藝運動はこのプロレタリヤ大衆の運動と協調聯絡を有しなければ全然無効である。大衆と離れた運動はたゞ徒勞であるか或は邪魔になるだけのものである。自ら階級文藝運動の戰士を以て任ずる人々にして往々これを理會しない爲めに葦原將軍式の笑ふべき誤解をしてゐる人がある。論敵や流行作家を緘口せしめることが何等かの絶對的意義を有してゐるかのやうに彼等は思ひこんでゐる。併しながら、局部の些々たる勝利から全線の勝敗が逆睹されないと同じく、そんなことはいふに足りない。文藝家が凡てプロレタリヤの軍門に降るとしても、依然としてプロレタリヤの文藝運動は繼續される。一層の熱心をもつて、ブルジョア階級がたをれるまで。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

要するにプロレタリヤの文藝運動はそれ自身に絶對意義を有するものではない。そんな相對的意義しかない運動では張り合いがないと思ふ人は、絶對運動に携るがよい。そして神でも射とめるがいゝ。太陽でも吹き落すがいゝ。

プロレタリヤの文藝運動は單なる觀念と觀念との戰ひではない。その背後に利害と利害とが睨みあい、權力と權力とが對峙してゐる。だからその運動は觀念の一起一伏でけりがつくものではない。それは長期にわたる、あまり華々しくないしかも困難に滿ちた運動である。万人歡呼の裡に決勝線に入るマラソン競爭ではなくて、雪と險路と窮乏と寒氣とのシベリヤ旅行のやうなものである。そしてマラソン競爭のやうに勝つても褒美が貰へるわけではなく、途中で行き倒れるかも知れない運動である、――尤も最近マラソン競爭でも死人ができて急に教育家が騷ぎはじめたやうだが――。その報酬はたゞ無產階級の解放があるのみだ。この困難に辟易し、この忍耐に怖じけづく人々は、プロレタリヤ文藝運動の行列を去つて、紅白の漫幕でめぐらした運動會場に趣くがいゝそこにはすぐに喝采してくれる群集がゐる。おまけに子女もゐる。

プロレタリヤ文藝運動は氣質や趣味で決せられるものでない。況んや一時の醉興でこれにまじらるべきものではない。前途は險難だ。光明の此方に闇黑と茨と鐵條網がある。しかもあまり榮へない運動だ。決勝力をもたない、一種の補助運動、牽制運動だ。この運動にたずさはる人はあまりに自己の役割を過大視してはならない。

しかし大衆運動の一部・壓迫されたものゝ運動の一員としてたとい隅つこの一部分でも、或は前衛隊の一員でもを分担することは光輝あることではないか。特に後者たり得るならばこれ以上生き甲斐のある仕事はまたとないではないか。不可能な大望を抱き、幻想を夢みるよりは可能な一事を實行する方に餘つ程意味と價値とがある。(五月十二日夜)

癈兵をのせた赤電車

金子洋文

上

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

冬であつた、雨雲がたれ下つて身をきるやうな冷たい風が吹いてゐた。

三宅坂から赤坂見附に突きぬけてゐる電車街路は眞暗闇であつた、その中を青山行の赤電車がはげしいうなり聲をあげて狂人のやうに走つてゐた。

車内はガランと空いてゐた、そしてひどく暗い。乗客は五六人ゐたが、魔醉劑をかいだ人のやうに、皆ぐつすり眠つてゐた、たゞ一人車内の中央に席をとつてゐた廢兵だけが眼をさましてゐた。

彼には兩脚がなかつた、どれも膝の關節から下部が全く削りとられてなかつた、彼は何うして街路を歩くことが出來るのだらう、いや、それより、こんな寒い夜おそく、一體何處へ歸つて行くのだらう。

彼は汚れきつた茶色の詰襟の服を身につけてゐた、カラアはなかつた、さびた金釦がいかにも寒むさうである。彼は木でこしらへた鞄を、肩からぶらさげてゐた、彼も多くの廢兵のやうに石鹼か齒磨粉を賣つて歩きまわつてゐるのだらう、鞄に

『不幸な廢兵に同情して下さい』と、綠色のペンキで書いてあつた。

彼は端然と座つてゐた、その形は一絲亂れずといふ風であつたが、かへつて吹き出したい程滑稽にうつつた、思ひきり失笑した後でなければ、どんな人でも彼の生涯に同情することが出來ないだらう。

彼の骨格は頑丈で堂々としてゐた、而し、肉はおちて枯木のやうに痩せ衰ろへてゐた、顏には血の氣がなかつた、削つたやうな深い皺が刻み込まれ、鼻が高いので眼がぐつと額の下に喰込んでゐた——その深い眼で、彼は硝子越しに走つて行く外の闇を眤つとみつめてゐた。

彼は何を考へてゐるのだらう、その眼は何を語つてゐるのだらう、鳩のやうにやさしく蛇のやうに呪咀に燃えてゐる、泣いてゐるやうにも見え、怒つてゐるやうにも見える、その眼の色は五分間も十分間も動かない、おそらく永久に動かないのだらう、彼は淡暗い車内に、恰も据付けられた悲しき巨像のやうに端然と座して、いつまでも外部の闇を眤つとみつめてゐるのであつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

冷たい闇の中を赤電車は狂人のやうに走る、走る、走る、ばく進する。

赤坂見附に來た。

下

すると、突然賑かな聲がして運轉臺の戸がガラ〳〵と開くと、一人の泥醉者が乘つて來た。電車が動いた、その反動で彼はよろ〳〵と前に走つて、車内の中央まで來てどんと腰掛に身體をなげつけると、『馬、馬鹿にするない』どろんとした醉眼を運轉手臺に向けて叫んだ、そしてブツ〳〵田舍出の運轉手の惡口を言ひ初めた。

彼は四十に近い勞働者であつた、あつく印袢纏を着込んでゐる、顔が丸く太つて、唇がビフテキのやうにあつく、鼻の下がひどくのびてゐた。

『俺は鼻の下で物事を考へるんだ』と言つてるやうだ。輕い吃りで非常に早口である。

運轉手に對する叱言に、少しも手應へがないので、彼は頗る不平であつた、彼は誰かにひどく喰つてかゝりたかつた、そこでブウと大きくくさい息をはくと、險しい醉眼を向けて車内を見まわし初めた。

やがて、彼は自分と向合つてゐる哀れな廢兵の姿を見つけた、(而かも廢兵一人だけが眠つてゐない)彼は急に起直つて上半身を前に屈めた、そしてあつい唇を尖らして、醉眼をするると、何か非常に面白いものを見物するやうな格好で、眤つと廢兵の姿に見入つた。

この狀態は一分間程つゞいた、彼の眼の色は好奇から次第に嘲りにうつつて行つた、と、突然、彼は大きな口を開くと割れるやうな聲で笑ひ出した。

ワハヽヽヽ、ワハヽヽヽと竹が割けるやうな嘲笑がつゞいた、彼は『馬鹿ッ、馬鹿ッ』と連呼しながら笑ひつゞけたそしてしまひには努力して無理に笑ひつゞけた。

廢兵は無言でゐた、彼の姿は一分も微動しなかつた、彼は依然として悲しさうな、怒つてゐるやうな眼色をして座つて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐた。

勞働者の罵る聲はだん／＼はげしくなつてきた、まるで鐵砲玉をとばすやうな早い調子でわめいた。

『手前は、そ・そ、それでも軍人樣か』彼はあつい唇を懸命に動かしながらどなつた。『何故戰死しなかつたんだ、な、な、何故戰場に屍をさ、さらさねいんだ、て、手前は逃げたんだらう、だ、だから背後から銃丸をくらつたんだ、お、おい、は、廢兵、手前は何故默つてゐるんだ、その眼は、な、な何んだ、手前は女のやうに泣いてるな、泣けツ泣けツ、て手前のやうなものは、泣く、泣く芝居でもしなくちや生きていけねいんだ、さあ、泣けツ、こ・聲、聲を出して泣いて見ろ、俺は今、手、手前に見料を拂つてやるぞ。』

彼は立上つてよろめいた、それから自分の罵聲の勢にのつて腹掛に手を突込んだ、そして、暫の間ごた／＼してゐたがやがて手に金を握ると彼は廢兵の顏を見がけて、さつと金を投げつけた。

汚ない十錢や、五錢の白銅や、銅貨などが、音をたてて飛んだ、一枚の十錢札がピラ／＼と舞つて廢兵の帽子の上にのつた、白銅の一つが深い皺の廢兵の頰にはげしくあたつた。だが廢兵は恰かも化石したやうに無言でゐた、唇の周圍が痙攣的にうごいたが、それも僅か瞬間におこつただけであつた。

この騷ぎに車内の人々は皆眼をさました、而し彼等はたゞ不思議な場面に全く氣を奪はれてゐるだけで、誰一人泥醉してゐる勞働者を取押へるものがなかつた。

異樣な沈默がつゞいた、勞働者はとつかゝるやうな形で廢兵をにらんでゐた、廢兵は依然として悲しさうな、怒つたやうな眼を向けて、端然と座つてゐた。

五分間は過ぎた。

電車が青山一丁目にとまつた、と同時に、立上つてゐた勞働者の身體が左右に動搖したやうに思はれたが、次の瞬間彼は尻餅をついたやうに、べつたり廢兵の前に座つてしまつた。そして何やら叫ぶと、兩手で廢兵の膝にとりすがつて、大きな聲で泣き出した。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『ワツ、ワツ、ワツ……』と彼は泣きつゞけた、しまひには彼は子供のやうに肩をゆすぶつて泣きぢやくるのであつた
隣兵は動かなかつた、彼は永遠の悲しき巨像のやうに默してゐた。
あゝ、奇蹟に似た光景よ。
赤電車は再び狂人のやうにばく進した。

—一〇・五・一八—

恐怖の片影（童話詩）

佐々木孝丸

—Une Alegorio—

人間の眼がものゝ象（すがた）を見るやうになつた幾億万年このかた、誰も、曾て一度も、その時の夕陽ほど巨きな太陽を見たものがなかつた。
人間の眼がものゝ色彩を見るやうになつた幾億万年このかた、誰も、曾て一度も、その時の夕陽程眞紅な太陽を見たものがなかつた。
曠原の上に三人の男が立つてゐる。
黑い着物を着た男が、どす黑く光つてゐる——腐つた血のやうに。
青い着物を着た男が、紫色に光つてゐる——毒鳥草の惡汁のやうに。
白い着物を着た男が、赤く光つてゐる——鮮血のやうに、また炉火のやうに。
曾て現はれたことのない巨きな夕陽が、嘗て目に映つたことのない眞紅な夕陽が、曠原の面へ小刻みに近づいて來る。
白い着物の男が、ますく紅く映ゑる。それが白い着物を纒つてゐることに氣付くものは誰もない——大なるMASOは曠原の遠い周圍を取り卷いてゐるのだ。彼等は白い着物の男を讃美する。——

Vidu la gloron alvenantan,
Jen! la celon ni prenas fine.
Nun naskigas la tempon novan,
Kriu laûte, Kantu goje kaj kore!

夕陽の巨きな焔塊は、地平線の彼方に沒しやうとはせず、曠原に向つて降りてくる。

俄然。見よ曠原の面に潰滅の殘骸が累々として現はれるを――三人の男が通つた後である。

夕陽は今や曠原の面に眞近く。併も一點に靜止して動かない。遠く距つてゐた maso は喚聲と共に近寄る。

このとき最も紅く映えたる白い着物の男が、鬣犬の如く襲來する maso に向つて、獅子の如く巨然と打ち向ふ――誇りである。

群衆はその前に歡喜し、また狂泣する。

黒い着物の男が、冷嚴にそれを見る。

青い着物の男が、獨り意識無き微笑を洩らす。

巨陽の火陷は曠原に燃え移らうとはしない。忽ち野の上を去つて地下に沒する………

おゝ見よ!

眞紅に映えた男が、忽ち白紙の如き姿に立ち戻る! 紫に映えた男が、忽ち青い本體に復歸する! 鬣犬の如く襲來した maso の驚愕と憤り――たゞ黒い着物の男のみが、一層その黒さを增す。

潰滅の殘骸の間から、むく〳〵と生命の波動が起伏し初める。然もそれを保護するものはかの、白紙の如き男である!

血のやうに燃える夕陽は沒した。血のやうに燃える姿はなくなつた。地上に紅い色はなくなつた。あるものは黒である

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゆる紅い着物の男に惑はされまい！

然も今、潰滅の殘骸の中から生れ出るものを「保護」してゐるのは、白い着物の男である……呪はれたる保護の名よ！

──二〇・五・一八──

歸村せる署長

飯田德太郎

深山署長の赴任以來、ＴＩ警察署員の性格が一變したとさへ思はれる程、口にする言葉、動作に著しく異なつて來る樣になつた。署長更迭で興奮した署員は、深山の計畫にズル〳〵引きづられ、新事業に着手した。その一つは人事相談が設立された事であつた。苦蟲を嚙み潰ぶした樣な顏の岡野がその仕に當つた。そして或る事件で警視廳へ出張してゐる次席部長の平井が歸つても當分仕事が無いであらうと思はれる程、大小の事務は深山が一手で引受けた。警察署前の掲示板へ次の樣な掲示が貼り出された。

色々の心配のある人、煩悶する人は、本署迄是非御相談に御出でなさい。

出來るだけ骨を折りませう。ＴＩ警察署長、深山順造

通行人は苦笑して通つた。そして操ぐつたそうに門內を覗き込みして行つた。

「警察の民衆化──。犯罪防止。に人事相談は必要だよ。成績は必つと上る。」

深山は掲示を出した日の夕方、一緒になつた刑事に、掲示板を顧みて言つた。

最初の日曜日　深山は生れ故鄕へ赴くので、朝から心が急いでならなかつた。妻は食器の後形付をする爲赤兒を脊中へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

引き繰くつて、台所に立働いて居た。妻の里の母親は、白髪頭を後向けにして、釜で湯を沸かすのに、竈の下を火吹竹でブー〳〵吹いてゐた。咽せる様な眞青い煙が、座敷中へ渦いて來た。深山はそれが堪まらなかつた。――俺か實家へ行くので、故意に二人があゝするんだらう――と、ハツキリとした形ではないが、これに似た嫌々しさが心に根張つて來た。彼は故意と大きな音を立てゝ、簞笥の抽出しを開けて、着物や何かを座敷へ放り出した。彼はその度に妻の或る態度を希がつた。然し妻は聞えぬのか、丁度食卓の上を洗つて居た。

「おい！」彼は遂に叫んだ。

「着物は何れだ？」

「え？」妻は振り向いたが、手は食卓の上から離れやうともしなかつた。

「もう行くんですか、今食べた物を整づけてからでも晩くはないでせうに？」

彼女は、又彼女の仕事をし續けた。深山はそれ以上何とも言ふ事は出來なかつた。妻の母が居ると云ふ事が、彼が暴君の態度に出でる事を阻止してゐた。それを知つてるだけ彼は憤りが心の中に燃えた。

「お父さん！　お錢？」

と二人の娘がその時深山の周圍へやつて來た。が姉娘のおきみは、父親のよくある眼附きを見て先づ足を引いた。しかし妹娘の澄子の方は、ザンザラに被つた髮の毛の中から、眞圓るな眼をして父親に迫つた。

「うるさい！」

深山は頑固に突き放した。しかし怒の對象にしてはあまりに頑是ない子供だけに、彼は致方なしに銅貨を二つ三つ與へた。二人は喜んで表へ驅け出さうとした。母親がそれを大聲に呼び止めた。

「きみちやん！　さだ公脊負つて行きな。」

彼女は、拭布を卓の上へ置いて、濡れてゐる手を前掛けで拭つてから、赤兒を下ろした。そして、おきみの脊中へ乘せて帶をかけた。ニコ〳〵しながら三人は出て行つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あの格好がや!」

老母は微笑んで振り返つた。が座敷に棒立になつて變な眼をしてゐる深山を見ると、又竈口へ顏を向けて終つた。

「錢さへ持てば喜ろこんでるんだよ。」

妻は何うやら形付け終つた臺所を見廻して言つた。そして端折つた着物の裾を下ろして、座敷へ行つた。深山の眼と視線が合ふと、彼女は吹き出す樣に笑つた。

「何ですねそんな所に立つてゐて、着物で行くんですか? 服ですか?」

深山はもう老母の笑ひを見てから俄かに心が溶けてゐた。妻に對して膨れ面をするのも、もう維持が出來ぬ程寛ろいだ氣持になつて、ゐたのであつた。彼は然し笑ひは見せずに、

「着物で行くから探してるんぢやないか。」

と、言つた。洋服の方が好い――と思はれないでもないが、あんなに箪笥の中から色々の物を引つぱり出した手前、そをも言へなかつた。妻は箪笥の前の散らかし方に驚ろいて、

「何を探すのにこんなに搔き廻はしたんでせうね、直ぐ此處にあるのに!」

と言つて、一重ねの衣類を出した。彼は妻が赤兒を瞞す樣な言葉付きにもう恥かしくさへなつて來た。彼は思ひ切つて言つた。

「洋服にしよう、便利で好い。」

言葉の終らぬ中に、足を鳴らして洋服を外した。

「その方が好いや!」

妻は衣類を出しつぱなしで夫の方を見守つた。老母も臺所から出て來た。

「何て煙いだらう!」

老母はそう言ひながら、深山の雄々しい姿? を見守つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「おい？　靴下の好いの出して呉れ！」

深山はヅボンを蹐きながら言つた。妻は早速衣類を簞笥に藏つて、一番下の抽出しに靴下を探し初めた。

「喜ぶべえよ、年も取つたし十五年も會はない事だからな？」

老母は、自分が娘に遇つた喜びを想ひ出す樣にして言つた。

「六十を越えたし、女二人限りだから。」

深山も感激深かさうに言つた。

「俺ら家見てへに若い男でも居れな格別、女二人の暮しだから、米も幾らも造られず、隨分困るつて話だからな！」

深山は自分の家貧窮だと云ふ事は十分知つてゐた。人の好い母と妹だけでは、一粒の米も見逃さぬ太兵衞遶りで何んな事をするか知れ切つてゐた。然しこれを他人に、殊に暮し向きの好い妻の母にそを言はれると、性來の負け嫌ひがフト頭を上げて來た。彼は老母の言葉が一時に癪に觸つた。けれどもこれを口に現はす適當な言葉が無かつた。こんな立場になるとジリ〳〵と心が熱して來るのが彼の癖であつた。

「早くしろ！」

妻に怒鳴つた。そして妻の手からヒツタクル樣に靴下を受取ると、サーベルを下げたばかりで、上衣のボタンもはめぬのに、もう靴を足先へ突つかけてイラ〳〵してゐた。

「帽子忘れましたよ。」

妻が持つて來た。これに又彼の氣が挫けた。

「老母さんにも、およし(深山の妹)さんにも宜ろ敷く言つて下さい。」

「皆んなに宜敷う！」

こをした妻と母の言葉に深山は風呂敷を疊んで持つたまゝ、急いで表へ出た。怒りばらしに自棄に小石を蹴つたりした何處へ行くにも誰か連れて行く深山は、悲慘な實家は見せまいと誰も供を連れなかつた。

深山は表通りの煤けた荒物屋へ立ち寄つて鰹節を三本程買つた。妻が何か土産を見繕らはうと云つたのを、例の自尊心が手傳つて妻に、

「そんなに困つてやしないし、子が親の所へ行くんだもの土産なんぞ要りやしない。」

と、拒絶つたが、一本のマツチでも欲してゐて、與へれば役立つ程貧乏な實家へ、例へ金は置いて來ると云ふものゝ、土産一つ持たずに行く事は出來なかつた。鰹節を買つて外へ出ると、隣りの汚ない三文商ひの前に、深山の娘三人がシヨンボリ何か口にして立つてゐた、彼は勿論知らん顔をして通つた。

縣道を左へ外れて山道へさしかゝると、小高い丘陵の松林から、初秋の太陽が木立を洩れてゐた。彼は寒さをさへ感じた。其處を出ると一帶の高地で、一杯に陽（ひ）を受けた畑からユラ／＼と陽炎が搖めいてゐた。この暖かい空氣を十分に吸ひ込んで、毒々しい迄濃緑の繁つた葉を持つて大根や菜が、廣く赤土の間に染められて居た。彼は幼ない頃の記憶を辿りながら畑中の間道を歩んだ。が、その頃と結びつけて神秘的な過去追憶をそこいらに求めるには、あまりに貧弱な、あまりに有り觸れた四圍であつた。それでも時に依ると、道端の道祖神や、馬頭觀世音の石塊を見て、ヒヨツト妹を脊負つて本を買ひに來た折々途中に出來た事なぞを想ひ出す事等あつた。見覺えのある男の顏か彼を振り返り勝ちに一つ通つた。その百姓男を誰と想ひ浮べる事は出來なかつた。高原の道は落ち着き切つて然も長かつた。彼は午少し前三里の道を越えて生れ故郷の村を畑の彼方の窪地に見出す事が出來た。坂を降りて村の入口の、大きな椎の木の下に茶店があつて、痛々しい風をした老婆が一人店先の塵に塗れて坐つてゐた。深山は此の茶店には一寸考へ附かぬ程澤山の記憶を持つてゐた。從つてこの考婆も、おさきさんと呼ばれた、元氣の好い女房（かみ）さんであつた事は直ぐ思ひ當つた。

「好いお天氣です。」

深山は表を通りしなに、懷かしい昔よく使つた言葉を掛けた。

「ヘイ！」

と、お婆さんは返事をしたが、見馴れない官服姿の人の挨拶したのに狼狽したがそれが順造であると氣がついて、ヨチヨ

チと下駄を突つかけて表へ走り出し、深山の後姿を腰を延ばして見送つた。彼の家は其處から五六町の所に在つた。思ひの外痛んだ家に彼は云ひしれぬ悲しみに滿たされた。表に脊を向けた家は、蜀黍や桑の木や池を持つた庭を南に見てゐた。彼は懷かしさうな面持で庭へ廻つた。廣い土間への入口は破損した戸が閉まつてゐて、褐色化した新聞紙張りの障子の破れ目から座敷を見たが、疊の上から佛壇迄眞黒になつてゐるのが見えたゞけで、人の影さへしなかつた。彼は致方なく帽子とサーベルを疊へ置いて庭の邊りをホツツキ歩いて見た。汚ならしい雜草が庭一面に被さつてゐた。面を覆ふてゐる無花果の木の葉の繁つた間から池を覗くと、青や赤の浮藻が一杯に浮いてゐた。彼は手を延ばして、総になつたと見えて、大方は萎れて了つた中からよく熟した無花果の實を一つ取つて、甘々しい快感を口の中に味つて見たりした。荒れ果てた故鄕——こんな悲詩劇的の事を思つて目を閉ぢた。——追々と活氣の失せて行くこの田園！この荒廢は何處へ迄行くだらう？——こんな事も考へた。

いそ〳〵しい足音がして來た。と、大聲にその主は言葉を出した。

「アレー何時來たや？　よく來たな。中へ入つたらよかんべえに！」

その聲は順造の母であつた。接ぎはにだらけのねんねこを着た老婆は白髮頭の下に微笑んでゐた。然しあまり深山の顏も見ないで、戸をコジ開けて土間へ入つて行つた。深山は引きづられる樣に後から續いた。老母は脊中の籠を下へ降ろして又云つた。

「水を持つて來べえ、足を洗ふのに？」

「構はね、新下のまゝ上るから。」

深山は上り端から上へ登つて、圍爐裡端へ座を占めた。老母は直ぐ上つて來て、汚ない疊の上へ花蓙を敷いて吳れた。

「今店へ寄つたら、おさきさんが息子が歸つた來たよ！　つて數へられて、狼狽てゝ歸つて來たゞが、皆丈夫たさうだなあ？」

「あゝ別に變りも無い、早く此方へ來やうと思つたんだが、何だかんだでつい忙しくて來られなかつた。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

深山は火の氣のないゐろりを見詰めて言つた。老母は直ぐ焚き付けを持つて來て燃やした。彼女は眞黒な鐵瓶を自在鍵へ吊した。

「未だ晝前へだんべに？」

「食ひたく無い。」

「茶漬けで麥飯でも一杯やんねへか？」

「好い、何も食ひたくない。」

「最も甘くもねへから、では茶でも沸すべ。よしが早晝を食つてN――迄行つたから夜でなけりや歸へるめへが、惜しい事をしたな。」

「N――へ？　何しに行つたんだらう？」

深山は煙を避けながら尋ねた。老母は煙管へ硬ばつた手附きで煙草をつめて言つた。

「少つとばかり買物でなTには無いつて輕便で行つたゞ。」

「買物？」

深山一寸つと不審に思つたが、氣が附いて帽子やサーベルを引き寄せ、風呂敷から最前の鰹節を出した。

「何も別に無いもんだから。」

「こら好い節だな。久しく小ちやい世帯で鰹節も食はれなかつた。」

母はこを云つて、淋しさうに笑つた。

「二人ぢやいくらも田を造られないだらうからな？」

「もう二枚しか田はやらねへだ。太兵衛どんで無理な事云ふてな、そりや小人數ぢや澤山は作れめへから致方が無いが今人が少くて、お前へん所で作つて吳れなきや、誰も手を出し人が無い。それぢや此方が二枚も三枚も田を遊ばしといてやり切れねへからと云つてな。納める米を一枚の田について一俵だけ增されて慾つたゞよ、それでなくとも牧穫の少いの

に年に二俵增されたんぢややり切れんて云ふて謝罪つたゞが聞いてくんねへだよ。」

「むん。」

「それぢや畑の方の納めはいゝから、つて言ふんだが、本當に暮して行けねへだよ。」

老母は何時か涙を目へ溜めて居た。

「お前ん所からまあ月々來たのでやつとやれたんだが。それに隨分非道いでねへか、太兵衛どん所で、元俺ん家で作つて出を遊ばしといてはなんて云ひながら、立派に男を雇つてやつてるだよ。それでゐて納める米を增させたなんて、話になりやしねへ。安藏(順造の從兄に當る人)もな、長いものは捲かれろつて云つて呉れるし。諦めてはゐるが……」

「ぢや今年も困るな?」

「今年はな、一昨日になつて、太兵衛どんの旦那が來て、お前ん所の順も出世してTへ來たさうだから、何時か相談してよしに聟でも貰つて分家した事にすれば、人手も出來るだらう、それに今年は不作だから二俵は負けとく、つて云つて來たよ。」

「フム! 下だらぬ奴だな。今年は餘程少ないかい牧穫が?」

「二俵位負けて貰つても何うにもならねへ位不作だゞよ。T——の方はもつと非道いつて話だが、困るな。」

「それで、よしに聟つて見た所で?」

「考へてはゐるだがな!」

「幾つになつたけ? 二十七八だな?」

「一度お前にも知らした通り聟を貰つたあ奴が生きてれば何も不自由ねへんだが。」

「自分ぢや後家で通すつて言つてるんか?」

「そう云つてるから、困つちまあ。」

「何うせこの家は分家した事にしてよしにやつてあるから、好いのがあつたら、そうするさ。未だ後家ぢや可愛さう

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だ。」

「さうでもないが……」

老母は笑ひ出した。深山も微笑んだ。鐵瓶がチン／＼音を立てゝ湯氣を吹いて來た。

「沸いた樣だから……」

母は鐵瓶を下げて臺所へ入つて行つた。深山はその後姿を見送つた。

「××どんのお婆さん！　ゐるかね？」

と庭の方から聲がして來た。それに對して老母が臺所から挨拶をした。足音は土間へ入つて來て。被つた手拭ひを取ると、從兄の安藏の妻であつた。彼はしかしこの女を知らなかつた。女は三十餘程越えた顏ではあるが何處か若い所を持つてゐる樣な氣もされた。

「おときかね！」

母は藥の道具を片手に提げて座敷へ引き返して來た。おときは順造の姿の見馴れぬのに默つてゐた。

「俺ら悴だよ、順造だはや！　これ安藏の女房だわ、N——の在から嫁たゞが。」

老母は二人を引き合はした。

「まあそうでしたか。一度も見た事がねへので、まお壯健で結構です。」

女は丁寧な、然もその挨拶が同じ小作人仲間へ對する樣な親しみを持つてゐたので、深山は殊の外機嫌よく挨拶を返へした。

「お茶一つ何うだや？」

老母は一杯ついだのを深山の前へ出しておいて、おときにこを云つた。

「おら鎌研ぐのに石を借りべえと思つて來たゞが折角だがから戴きますべえ。」

おときはゐろり端へ上つて來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「子供衆は幾人です？」
おときは深山に聞いた。
「四人ありますよ、一人は中學へ入つて後三人は家に居まさあ、年甲斐ひもなく生れるんで……」
「小さいのは幾つです？」
「まだ三つです。」
深山は笑ひながら答へた。と、老母か、
「一番上が男で後皆な女だつけな？」
「ア、男は一切り。」
「そりや淋しいでせうね。」
「それで何かい、やつぱしK――中學の寄宿舍とかに居るんだね？」
「さうだ、やつと三年生になつたばかりで、卒業迄丸二年あるから容易ぢやない。」
深山はそう云つてから、漬かり過ぎた澤庵を一片口へ入れた。
「生きてる中潤一が立派になるのを見てへもんだが、この先幾年持つか？」
老母は眼をしばたいて俯向いた。深山はその面に見入つた。
「ほんとになあ！小人等こをして、朝から晩迄食ふや食はずに生きてるんだもの、せめて息子や孫の立派になるでも目なけりや、折角生れて來た甲斐がありやしねへ!!」
おときも感激深さうに云つた。
「これでは、順造が百姓でもして居れば、潤一だつて學校どころぢやねへんだから、死んだ添れ合ひが、百姓にはなるなつて潤一が足掻つて言つたが、百姓になんねへで何の位好いか知れやしねへ。そりや生きてりや何したつて一苦しみはしなけりやなんねへだが、同じ苦しむのも、先の見えた百姓なんぞよりや、世の中へ出て苦しんだ方が好いだ。」

老母は順造が來た故か、可成り平常より云氣がある樣に、おときのみ見られた。深山は默つて二人の言葉から何か見つけ出すかの樣に耳を濟まして聞き入つた。

「人ばかり虐待たつて好い後生は出來ねへよ、太兵衛どん所みた樣に!」

おときも地主に何か恨みでもある樣であつた。然し何の小作人でもその地主に對して親しむには如何なる溫情で地主が小作人に對しても望む事は出來ないのが通例で、それは小作人でも、根本からの矛盾を感じてゐたからであつた。

「よく佛樣を信心しねへと、自分が死んでも後の代の者が供養してくれねへと同じに、人に惡るくして、末始終好い事はねへだ。」

深山はこれ等の言葉裏からして、朴質な農民が先祖を供養するのは、丁度自分自身を供養する事と等しい事に氣付いた。宗敎も滅びかけてゐる――こを斷定するを得なかつた。生と死との間に橫はる運命の恐ろしさに、人間は神佛を造つた。そしてそれを拜し信ずる事に依つて、運命を忘れ樣と試みたのであつた。然しこんな兒戯に類した事に自覺しない者はない。もう愚直な農民迄こんな事は知り切つてゐる。神を祈り、念佛を唱へ、御題目を口にする間から、運命は、死は首を出す。祈る者の心に煩悶と焦慮の絕えないのはこの恐怖の首を見るからではないか? 何うしたら平氣に人生が眺められるか?……これは人間の口へ墓の土の一握が封じ込められて終ふ迄反問し續け、そしてそのまゝに終つて終ふのである。自分の子や孫を自分だと諦めて死ぬ! 何と云ふ冷やかな人生だらう!――深山はこを思ひ到ると、襟元からネバネバした液体でも流し込まれた樣な身慄ひを感じた。彼は番茶の注がれた面に、灰の澤山溜つて終つたのと、老ひた母の淋しい面を見較べた。老母は煙に惱まされるのか、苦しさうな咳拂ひを二つ三つ續けた。

「何時迄喋べつちまつて、ちや研石一つ借りてきます。」

おときは土間へ下りて云つた。

「井戶の傍にあるから持つてつておくんな。今夜湯が立つから爻入りにおいでな!」

「はい、大きに御邪魔しました。では御ゆるりと遊んで行かつしやい!」

おときは歸つて行つた。

「今夜泊つて行つも好かつぺ？」

老母は深山を覗き込んで聞いた。

「來たばかりで仕事は溜つてるし。又何時か來るとして歸らう。それから……」

深山はポケツトから用意して來た金の二十圓を差出して、

「……これ置いてこう。」

と老母へ言つた。老母は干乾びた手を出して受取つたが、

「こんなに、俺ら方ぢ二人限りで、幾らも暮しを納めれば好いんだが、お前へら方ぢや、子供も多いし、交際もかゝるし、こんなに置いちや困るたらう？」

「何に！（深山は元氣よく言つた）大丈夫だとも、もう少し置ければ倘好いんだか……）

「眞然から云へば、此方から仕送りをするのが當然だのに、全るで逆だ。」

老母は涙も流さんばかりに喜んで、金を早速佛壇へ上げて、亡き夫へ何か念じながら線香を立てた。深山はその後姿をジツと見てゐたが、この位の金をかく迄喜ぶのに、こをした農民の血をしぼる様な地主等に對する反感が心に燃えた。

——弱い農民よ自己の力を覺れ、三千年來の桎から脫れろ——彼は心に叫んだ。何か大きな葛闘が自分の周圍に起る様な予感もせられて來た。（一九二一、一二作）

○

路傍の男

今野賢三

いつでも何かにどぎもを拔かれて、ぽかんとしてゐるやうな顔である。そして死魚のまなこのやうに濁つた眼が、無表情に見据へられてゐる……。

――その彼が、機械のやうに足をうごかしてゐる。それはまつたく、歩いてゐるといふよりは「機械のやうに足をうごかしてゐる」と言つた方があたつてゐる。さうして彼自身では、何か巨きな灰色の手にでもつかまつてゐて、幾らじたばたしてもうごきがとれなくなつてゐる――と言つた氣持をしよつちゆう感じてゐる。同時に、頭のなかゞどんよりと曇つてゐて、たへず何かに追驅けられてゐるやうな自分をも、ハツキリ感じてゐる。

それだから、靜平な、澄んだ、自分自身を、文明の都會！といふ奴から完全にとりもどしたい！かういふ氣持がしつきりなしにうごく……。

「パンに飢えて、不安に漂つてゐる自分を瞬間でもいゝからどうにかならないものか!!」

彼はしよつちゆうこのことを考へる。

『瞬間でもいゝから自分を救ひたい！』

から思ふと、同時にまた、異性にも飢えてゐる自分のさもしいすがたが明確になつてくる。それはまるで、沙漠に水を求めるやうに、渇しまつて、夢中に口を開いたまゝ、恨めしさうに地上から大空を見上げてゐる――自分だ！と彼は思ふ。

今の彼にとつては、むしろ、過去の勞動時代がしのばれる。

手や足や顔まで油で黒くして、萬力の前に突つ立つて、ハンマアを片手に無心にはたらいてゐた――その時代の無智が今の彼には幸福なものにさへ思はれる。

しかし彼は、工場主たちのふところを肥すために機械となつてゐるんだ！　と氣がついてからすつぱりと職工の油服を脫いだのである。さうした理智の眼がひらけてから、彼の放浪生活は創まつたのだ。

……猛獸のうめき聲のやうな、クレーンのひゞき……毛をむしりとつたあとの、鷄の肌を見るやうな、赤はだかにされたボイラのなかを、突き破つて聞える鐵槌の音……。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

――歩いてゐる彼の耳に、これ等の音響がグワン、グワン！　と遠くからひゞいてくるやうな氣がする。

そして、旋盤、組立、仕上、などの工場内の光景が見えてくる。わけても、（彼は組立工であつたのだから）ハンマアを打ち下すごとに、タガネが喰ひ込んでいつて、やがて鐵板か二つに裂ける……さうした瞬間がもつともあざやかに彼の眼のなかに見えてくる。

鐵板が二つに裂ける！　かう思ふだけでも武者震ひとでも言ひたい、ぞッとした氣持を感ずる。

〇

……芝口へ出ようとしてゐる彼は、何時の間にか新橋驛を眼のあたりに見てゐた。

往來は案外砂ほこりも立たず、五月の、なんとなく薄い濁りを帶びた太陽の光りが、音もなく溶け込んでゐる。

ふと振りかへると、古洋服を店頭にぶら下げた軒から軒は、かなり靜に見渡される。

彼が右に曲らうとすると、すぐ眼の前を黑い喪服を着た人のやうな行列が通りはじめた。百人近くの、それ等の行列から、カサとの佩劍の音もひびかない。それが彼には、何となく物足らなく、不思議に感じられた。それだけまた、彼に背を見せて、せわしく、默々と、そして靜に、まるで息の通つてゐるい人間のやうに通り過ぎたのである。

芝口は、警戒のもの〳〵しさで停留場のあたりが妙にさわついてゐた。

金線のチラ〳〵ひかる肩をそびやかしながら、腰の劍を抱へるやうに握つて、向ふ側へ駈けてゆくのもゐた。

……最うこの時、彼の頭のなかでは、はじめて見る勞動祭を、いろ〳〵に想像してゐた。

すばらしい叫換のうづまきが彼の眼に見えてくる。すると彼の胸の血が急に熱くなつてきてうづくやうに感じられる。

停留場には刻々、いろんな人が四方から集つてきた。しかし、少しでも人だまりがするとすぐに、『歩く〳〵』と追ひ退けられた。――そこの角の甘栗屋の店頭で、あたりのざわめきにおちつかぬ眼を走せてゐた、十七八の女中風の小女が、片手に襷をにぎりながら、けゞんにたへないといつた顏をひよいと往來に突き出したと思ふと、すぐにそのまゝ顏をひつこめて、なほも外の樣子をうかゞつた。

停留場には、四十ばかりの、太つた、赤ら顔の、電車の車掌の監督らしい男が、行列の通るのを待つてゐるかのやうにそこいらをぶら〳〵してゐた。

すると、何思つたか甘栗屋の小女が往來に出て來た。そして、一寸もじ〳〵してから、不意に、例の監督らしい男の傍へ小走りに近寄つた。

「何か、お通りになるんでせうか？」

監督らしい男はにこ〳〵してその女を見下するやうにした。

「勞動祭だよ」

女は解せないやうな顔をして、だまつたまゝ、眼をあげて最つとその說明を求めた。

「勞働の神樣がお通りになるんだ！」

男はまたにこ〳〵して言つた。

「それぢや襷をはづして見なければいけないわね」

女はひとりでうなづくやうに、早口にかう言つてひよこ〳〵とそのまゝ店頭にしりぞいた。

彼はその一瞬間の場景を、思はず微笑みながら、非常に眞面目な興味をもつてながめてゐた。

例の監督らしい男は、それなり氣にも止めないらしく、すぐ手前に止つた電車の運轉手と、何やら話をはじめた。

……しばらく――彼は行列の來るのを待つために、甘栗屋から二三間はなれた家の前に佇立んだ。

それから十分ばかり、彼は空虛な心持になつて足下に眼を落してゐた。

ふと、何心なく顔をあげると、白粉を濃く塗つた若い女の、電車を待つてゐるらしい、はなやかな姿が眼に映つた。薄い時色の絹のスカーフを兩胸に垂れて、彼の方へまともに顔を向けて立つてゐる傍へ、良人らしい若い洋服の男がよつて行つて、二人で何やら囁き交した……。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すると彼には、その女の着てゐる荒い縞の、しつとりとしたお召の着物の下から、白い綿のやうに、やんはりとした、そしてなめらかな肉體が、ハミ出して見えるやうな氣がして來た。同時に、前日聽いた、ニコリスク歸りの若い友達の話が頭に浮んできた。

——○○○軍人が土手の下から、上を通るロシアの女の足をかつさらつて……ひき落して……それから……。

彼の眼のなかに、肉體をふみにじる瞬間が描き出された。そして、さうした瞬間の場面に、四五間前方に立つてゐる例の美しく着飾つた女を引入れて、いつしよくたにして、彼自身が主人公になつて、衆人環視のなかで、自分の堂々たる行動を！

……頭のなかですつかりこしらゐあけてしまつた。

「カンカンと照る太陽の光りの眞下で、やわらかい、若々しい豊滿な肉體をさいなみつくして、凱歌をあげるやうに笑ひたい。笑ひたい！　全世界の人々の胸の底まで響き透るほど、心ゆくまで、腹の底から笑ひたい！　笑つて、笑つて、笑ひつくした瞬間に此の世から消えてゆきたい！」

かう思ふと、不思議に、彼の胸が、針でゞも突かれてそこから涙が浸み込むやうに痛くなつてきた。いつぱいの、なにもかもにむかつて放たれてゐる憎惡と、涙と、笑ひを、やわらかい肉體を足もとにしつかと踏まへたまゝ、いつしよくたに吐き出したいといふ氣持が、猶一層、もりあがつてくる火のうづまきのやうに感じないではゐられなくなつてきた。が、さうした心持も、ながい彈力を保つてゐることが出來ないで、わづかの時間をおいてしだいに冷たくなつていつた。

そして、彼の心持にはまたゝく間に空虚がもどつてきた。それで、

「まだ行列は來ないのかな、どうしてこんなに遲いんだらう！」

と、思はずかう呟きながら、いらいらと、あちこちを見まわした。

つひに彼は、さうして立ちつくしてゐることが、自分の貧弱な姿を晒物にしてゐるやうに感じられてきて、いつそ歸らうかとも迷ひはじめた。

やがて、午後三時頃の、曇りを帯びた、にぶい日射しの流れてゐる、何となく冷たい感じのする往還を、つまらなさうにながめながら、彼は銀座の方へと歩き出した。

〇

……それから暫くたつて、彼は瀧山町へぶらりと出て來た。

石造や、煉瓦などの家と家とにはさまれた小さな露路や、隣り合せの狹いすきに、無理に壓しこめられたやうになつて身をすくめてゐるたくさんの警官が彼の眼に入つた。

オートバイで疾驅してきた警官が、仲間になにやら打合せて行つてから、一寸しばらくたつて、誰からとなく『來た！來た！』といふ囁きが起ると、兩側にならんだ群集は、われも〳〵とのびあがつて遙か前方に眼をやつた。

彼もそれ等の人ガキの間から前方を望むと、なだれを打つやうに歩いてくる、人の群のなかゝら、白い旗が先づ見えそれから赤い旗も見えて、そして、ひた押しに押して來るやうな行列が、またゝく間に近寄つて來た。同時に、地の底をもぐつてくるやうな唄聲が迫つて來た。

――そして、見る〳〵眼の前に……。

腕章をつけた洋服の男たちが先頭になつてゐるが、彼の眼からはごた〳〵になつて見えるだけでそれ等の個々の姿がはつきりしない。

薄く、ボーと立のぼつてゐる砂塵と、黑い、いつぱいな人の姿で、その行列は包まれてゐる。そして、眼まぐるしく、ゆるやかに、彼の前を通る。

彼の心持はわけもなくあはたゞしくなつた。

「純勞動組合」

の黑い旗が、ふと彼の眼にとまつた。

毛むじやらな、こぶしを握つた片腕が、すべを壓迫するやうな曖昧を見せて、その旗に書かれてある。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だらりと垂れた、吊旗を思はせる黒地のその旗と、小倉の勞動服の一團——。もたれ合つたり、腕を組んだりして、〇〇歌をうたつてゆく……。

つやもうるほひもない、頬骨の出た、蒼黒い、ガツシリとした顔がつゞく。その唄聲には燃え立つやうな生き〱としたところがないやうに聽かれる。が、それだけ、生に疲勞し切つた人々のやうでもあり、何となく底に凄味がひそんでゐるやうでもある。

彼には、その行列が案外おだやかなので、何か吊ひの行列を見送るやうな、靜けさを感じないこともなかつた。が、かなりな血のそよぞに、やわらかな氣持のよみがへつたことも事實である。そしてまた、一方では、その唄聲を聽いてゐるのが、非常にいゝ氣持でもあつた。

「自分もこの仲間に割つて入つて、いつしよに、胸を張つて、堂々と唱つて行かう!」

彼はかう思ふと、たまらなくなつて、群集に押さるゝまゝ、だまつて行列に割込んでしまつた。

ところが彼はどうしたものかいつしよに唱ふ氣持になれなくなつて、たゞせか〱と人と人の間にはさまつて歩いた。そして、「これだけでいゝのかな?」といふ氣持が、むくりとあたまを擡げたのを、自分自身に見た……。

ふと、鞘のとれた、むき出しな一本の、旗の鎗が彼の眼に入つた。するとどんな刺戟にも、何等の反撥も呼びおこさなくなつた、人の胸に、不意にナイフを突きつけられたやうな、澄んだ、快さが、ぽつかりと波紋を描いた。

……人波にゆれる旗棹、そのてつぺんの鎗のほさき! その下にだらりと垂れた黒い旗……。

晝寢からやうやく覺めて、背のびをした時、チラリと、しかもあざやかに、きらめくものを見たといふ程度で、ある名狀しがい明確さが、彼の心持によびさまされた。

彼は、白くひかつてゐるそのほさきを、恰も口を開いて吸ひ込むやうに、またゝきもしないでむさぼり見入つた。そして、そのほさきを見のがすまいと、天上にばかり眼を向けながら、ボーどなつて人波にもまれてゐた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そのうち、どうしたはづみか、その・たゞ一つの鎗のほさきを、彼は見失つてしまつた。それでからだからあたゝかみがいつぺんに抜け去つてしまつたやうな失望を感じた。

彼はほかの旗を眼でさがしたけれども、さうしたほさきを見出すことが出來なかつた。彼の心から、やはらかな、そしてまたあざやかな、よろこびの影が消えた。

それから二三分間の後には、彼はまたいつものやうにぼんやりした顔をして、行列からはなれて歩いてゐた。

地の底からでも洩れるやうな、まち〳〵な勞動者の唄聲が、彼の耳元をしつきりなしに掠めてゐたが、そのうち、行列は彼のかたわらを通りすぎてしまつた。如何にもあつけなく通りすぎてしまつた。

彼の心には、じつとしてうごかない、あの錆た水の色のやうなひやゝかな、空虚がもどつてきた。

彼は言ひようのないものたらなさを抱きながら、靜な横町へたゞ一人曲つた。そして、井戸の底へでも引込まれるやうな、不意に湧いた寂しさをごまかすやうに、『あゝ積年の此の恨み……』と口のなかで呟くやうに唄つた。（五・三）

ブルジョア文藝の不倒子を突倒す

津田光造

階級意識の藝術、論戰日尚淺く、ブルジョア文藝の本營は、ブルジョア制度の健在と共に、その堅壘に護られて、プロレタリアの猛襲に脅へながらも、（遠いことはあるまいが）俄かに陷落し得べしとも見えず、その幇間共はなほ苟且偸安の夢を食つて居る。

それは恰も、耄碌した頑固親父が、體が日益に衰弱しても、思想が時代錯誤して居ても、「自分の身代」を手離しかねて「戸主權」の威光の蔭に居て、息子の前で、昔話を例に擧げて、暗雲に强がつて見せて居る樣なものである。舊い道德や信

仰で、中風病の樣に痲痺して、偏狹に凝り固まつた耄碌の藥罐頭が、何時迄も〳〵、生活支配の權威として、いやにテラ〳〵光つて居るのは、新しい思想感情で動いて居る息子から見て、いくら光つて居た所で、電燈ほどは明るくなく一つ有る丈目障りで、無用の長物である樣に、ブルジョア文藝と云ふ奴は、プロレタリアの文藝に取つて、まことに無用の長物で、厄介な代物である。

親の財產當てにすれや、藥罐頭が邪魔になるからではない。自覺した青年は父老の持つて居る黴の生えた道德や信仰、習慣や制度になんか賴らうとはしない樣に新興のプロレタリアは、ブルジョアの美學や藝術觀に賴らうともしなければ、又それを當てにして居るのでもない。何んなにそれが壯重に嚴めしく自惚れて造られてあつても、新興のプロレタリアは、それにチャームされ、或は惚れ込む樣な事はない。隨つてそれを乘つ取らうとはしない。それが壯重に嚴めしく自惚れて構へて居れば居るほど、新興のプロレタリアは、それに對して反抗的乃至は破壞的感情を强める樣になるだけだ。親の財產を後生大事に相續して護つて居る樣な息子は、丁度、巡査がブルジアの財產を保護する爲めに設けられてある樣に、財產の番人に生れて來た低能兒だ。恰も福士幸次郎の如き人間が、この低能兒の馬鹿息子だ。

人間一人前の能力を持つて生れて來た人間なら、たとへ一度はそれを相續しても、皆使ひ果すか、拋棄してしまふか、とにかくそんなものはきれいサツパリとなくしてしまつて、或はそれを自由な生長の糧にしてしまつて、裸一貫になつてそこから獨自の身代を創造するのが當り前だ。有島武郎氏はさうしようとする意志を持つて居るから、たとへ實行はしないでも、人間一人前の能力は持つて生れて來た人間だと謂へる。それを實行する事の六ケしさは、プロレタリアが警戒機關の嚴めしく備へられたブルジョアから、金銀財寶を盜み取る事が中々困難な事である樣なものだ。プロレタリアがブルジョアから金銀財寶を盜み取る事を、如何に正當な行爲として自分では是認しても、容易にそれが實行されない樣なものだ。どちらにしても、プロレタリアは賛成だが、ブルジョアは批難するだらうから。そして現代は支配階級者たるブルジョアの道德意識感情が生活の權威となつて居るのだから。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それはとにかくとして、今のブルジョア文藝と云ふ奴は、親讓りの財産のブルジョア美學の番人をして居る馬鹿息子の樣なものだ。何でも神妙にそれのお守りをして、「傳統の美」とか「永遠性」とか「愛」とか「技巧の冴え」とか「藝術の爲めの藝術」とか云つた、ブルジョア大學の學生が試驗勉强の時にでもなければ、誰れも問題にして居ない樣な陳腐な偶像をかつぎ出して、成るべく「ブルジョアの美感」と云ふ浮薄な感情を喜ばせて、頽廢した心を魅惑し、不健全な官能を陶醉させて、快い夢の世界へでも誘つてやれば、それでお守りの役目は濟むと云ふものだ。さうして朝から晩までブルジョアの爲めに働いて、稼いで居れば、その合間々々に何んな惡る遊びをやらうが、博奕を打たうが、女を蕩らさうが、妾を持たうが、遊蕩に耽らうが、先づ飯に食ひはぐれる心配はないと云ふものだ。さう云ふ眞似を仕得ない奴は「話せない」とか「野暮」だとか、いやに通がつて見せて、工場の子供が何んなに泣かうが、耕地で餓饑が何んなに喚めかうが、俺らの旦那はブルジョアだと、空嘯いて居さへすれば、それを又えらさうな事に考へて、好い氣になつて共鳴したり、追從したりする馬鹿野郎やあばずれお孃があつて、跡を追かけて讃美しながらついて行くのだから、實際世の中は廣いものだ。さう云ふ人間も同じ空氣を呼吸して、同じ太陽に照らされて居るのだから、ブジョア文藝と云ふものは、ブルジョアに取つては確かに有難いものであるに相違ない。それ丈にそれは又、プロレタリアから見て厄介な代物た。

何んなにプロレタリアの文藝が議論をケシ掛け　理窟でそれを押し潰さうとした所で、理窟だけでは通らない世の中なんだから人一倍苦勞人のプロレタリアは、勞資協調位の所で、ブルジョアの云ひ分に誤魔化されて「まあ好いや、何うせ文藝なんかは生ま溫いものなんだからな」つてな事になつて、好い加減に妥協してしまふので困るのだ。皆を瞋らせて、「貴樣はブルジョアのお守りぢやないかッ、そんな所にウロ／＼して居ては俺達の爲事の邪魔だッ、婆娑塞げめ、早く引込めッ」と呶鳴つて見た所で、龜が甲らへ首をすつ込める樣に、穴端へ腰を掛けて居ても、中々穴の中へ引込める人間ではなし、況して乞食を三日すれば忘れられないといふ人間であつて見れば、同じ乞食でも、お大所の乞食は貰ひがよからうから、一度〆めたら中々その味は忘れられまいから、お巡りさんと云ふ商賣が、何んなに馬鹿らしさうに見えても、誰れかゞ廢めればまた後から／＼と、同じ馬鹿が現れて同じ商賣に有り付いて來る樣に、一人や二人やブルジョアを廢業し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ても、また後から／＼と志望者が出來るのだから、クサクサする。

結局、呶鳴る方で根氣敗けがして、元の木阿彌ぢや詰らない話だ。「娑婆ッ塞げはお互ひ樣だ、呶鳴る方も骨折りだらうが、呶鳴られる方も騷々しいよ」つて事になつて、圖迂々々しくもブルジョアに（その常套手段に依つて）妥協を申込まれると、生地のないプロレタリアは、直ぐ上つたり屋になる。どうも賴み甲斐のない話だが、人の好い宮地嘉六さんは、逸早くも、斯うした上つたり屋の一人と有り了せて、「夢でゴルキーを見て」居るとか。現實のゴルキーがそれを聞いたら、如何にも現金で、憤慨する氣にもなれないだらうがせい／＼苦笑位はするだらうと云つて居る人もある。

何しろ、ブルジョア文藝と云つても、それが獨立した一つの社會とか國家とか云つた生活の全體を爲して居るものであれば、却つて仕末が好いのだが、言論で勝負が付かなければ、力づくでヒッ繰り返してしまへば文句はないが、文藝を一つヤッ付けた所で、それで根こそぎそれがヤッ付けられたと云ふ譯には行かないのだから、大底考へ込む樣になる。

ブルジョア文藝は、ブルジョアの制度、資本主義の社會に根を張つて生れたものだ。資本主義の社會がブルジョア文藝を生んだのだ。それだから、資本主義の社會が存在する限り、ブルジョア文藝と云ふ奴は、倒しても倒しても、後から後からと同じ樣なものが生えて來る。ぢれつたい話だが、丁度、尻の重しを取らずに起上りこぼしを倒して居る樣なものだ。その資本主義のカラクリが、不倒子の尻の重しを取る樣に、ポクリと取れゝば文句はないが、一人や二人の人間が、机の上でペン尖でコジキ廻して居た所で、中々動きさうにもしない。ロシヤでは何百万と云ふ民衆が蟻の樣に寄つてたかつて力づくでコヅイたら、どうやらやつとの事で突倒す事が出來たさうな。が、それにしてもまだ根こそぎと云ふ所まではゆかぬらしい。そんな大仕掛けな藝當が、一人や二人のペン尖で、首尾よく演じ了せたら御喝采を願ひ升、と云ふ所だが、實を云ふと、ペン尖でコヅギ倒すには、文藝が美學位が、その弱さ加減に於て、丁度適當して居る事なのだ。

不倒子と云へば、菊地寛や久米正雄は、その作品がさうである樣に、その態度に於て、容貌に於て、現文壇に於ける不倒子の代表的な好一對である。倒されても倒されても、また平氣な面らをして起き上つて居る。そして何食はぬ顏をして

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

将棋などをパチリ〳〵とやつて見せて居る。一斯くの如くにして我等は純然たる資本家の幇間である」と云つた形。時に勞働問題をテーマにして通俗小説を書いた所で、さうした收まりかへつた現狀滿足或は現狀維持的な作者の感情が何を創作するだらうか？——餘りに早くだるま然と超越して・若朽した勞働者の悲哀でも書くか。卿等がさうしてだるま然としてすまして居られるのも、皆資本主義制度のお蔭だ、と思ふと，彼等の何處に資本制度を呪ふ所の（ブルジョア意識の生活に對する）憎惡の感情があつて、敢て勞働問題や階級意識を藝術のテーマに取り容れようとする欲求が起るのか？——一體、資本制度の現狀を維持し肯定する彼等ブルジョアの幇間が、何の必要があつて敢て「創作」なる爲事をしようとするのか？　彼等は圖迂々々しさに徹底して居るのである。彼等は社會制度の現狀を肯定する精神から、厚顏しくも、敢て創作をしようとするのである。さうした安易な妥協の精神で、手先の器用だけでこね上げて出來た物を、創作と認めろ樣な者はよく〳〵の大馬鹿か穀ツ潰しかである。若し彼等にも少し藝術的な良心があつたならば・速かに「創作」に從事する事は斷念して・ブルジョアの遊興を一生懸命に護衛するお巡りさんにでもなつたであらう。その方が利口振らずに、世を誤魔化さずに居る丈、まだ增しだ。

アティストの獨考

佐々木孝丸

支那の青年達が、反基督教の運動を起した。その隣りの日本の元勳が五十年前に封建の殼を打ち破つて維新の大業に成功したとき、『排佛棄釋』の運動が起つた。

維新の大業に成功して、排佛棄釋の運動を起した日本の青年及び元勳達は、當時の日本の新人である。

目下、反基督教の運動をなしつゝある支那の青年達は、今日の支那の新人である。

維新の日本の新人が、『排佛棄釋之論』を主張した根本の觀念は、彼等が彼等の手によつて封建の殼より脫出せしめ得たと信じてゐた社會を、より以上封建の社會へ後戻りさせやうとすることであつた。『日本は神國である!』隨つて『日本人は當然神道に歸依し佛道を棄つべきである!』と。

即ち此の場合の反佛教は反宗教でなくて、單なる反宗旨であつたのだ。進化に即した運動ではなくて、寧ろ退化のための運動であつたのだ。

來るべき社會といふものに對して、歷史的必然の上に思想的根據を置くものにとつて、反宗教の運動は、たとへその力がどの程度に薄弱なものであらうと、兎も角も若干の意義がある。雖然、單なる反宗旨の運動は、たとへその眞見さがどのやうに深いものであらうと、何等の意義がない。

支那の青年達の反基督教運動が、單なる反宗旨のための運動でないことは分つてゐる。然も更に、單なる反宗教の運動でないことも明白である。反宗旨のための運動でもなく、又更に單なる反宗教のための運動でもないとすれば、果して何のための運動であるか?――今日の支那の新人は、蓋し革命前の露西亞の新人に幾多の共通點を持つ。

佛蘭西大革命に遭遇する以前のサン・シモンは、彼の歷史觀を形成するに當つて、政治の決定動機を宗教に置き、宗教の決定動機を智識に置いた。隨つて、歷史の進行を司るものを智識に置きながら、宗教の大なる作用を是認した。そして其處に歷史的必然性を置かうとした。それが彼の初期の思想の誤りである。

マルクス派の人々の中には、基督及びその使徒達の運動を、當時に於ける勞働運動であるとなすものがある。『太初に道（Word）あり……萬物これに由て造らる造られたる者にして一として之に由らで造れしは無云々』といふ約翰傳冒頭の文字

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を、『太初(はじめ)に勞働(Work)あり……萬物これに由て造らる云々』と讀むだウンターマンの皮肉は、併し單なる皮肉ではない。

今日の吾々の前には、全く不用なるものが、澤山にのさばつてゐる。

大臣、貴族、坊主は敢て露西亞の例に俟つまでもなく、この不用なるもののうちの、第一列に屬する。不用なるものを除くことは、やがて有用なるものを生かすことである。其處に、目下行はれつつある支那の反基督教運動の眞意義がある

度し難きものは、釋迦によれば『緣無き衆生』であり、吾々によれば今日の坊主共である。が吾々は、度し難きものを、たゞ度し難しとして消極的にうつちやつておいてはならない。度し難きものには、積極的に席を退かせることだ。吾々は最早『中立』を容認しない。唯敵か味方かである。

若し彼が當面の敵でないとしても、當面の敵を擊つに妨げとなるならば、彼も亦當然擊たるべきである。それは理論ではない。實際だ。そしてその實際の現はれを、自分はテロリズムに於て見る。

眞の反宗教の運動は、これを譬論的に云ふならば、(餘りに誇張し過ぎるかも知れないが)テロリズムの一方面への現はれであり、思想的な現はれである。そしてそれが最早單に思想上からだけではなくなつた場合、云ひ替えればそれが實行上に移された場合、其處に、反宗教だけでは濟まされない別なものが起る。反宗教は全體としての社會革命の先驅ではない。が少くとも、先驅のうちの一つではあり得る。

『あり得る』ことは『ある』ではない。支那の反基督教運動が、この先驅の一つで『ある』程根底の深いものであるかどうかを自分は知らない。唯、再び云ふ、今日の支那の新人は、革命前のロシアの新人に幾多の共通點を持つ。

既成宗教の發達史は、常に階級鬪爭の歷史の陰となり陽となつてゐる。權力は宗教を利用し、宗教は權力を利用する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その最も甚だしい例を、露西亞(過去に於ける)佛蘭西、日本等に於て見ることが出來る。(がこれは、サン・シモンの云つたやうに、宗教が歷史を決定するのではない)

現在の社會に於ける既成宗教の持つ心理は、進歩せる資本家の心理と同斷である。一は屈從的愛を强ひることゝなつて現はれ、他は溫情主義、勞資協調主義、社會政策主義となつて現はれる。共に、「地上の波瀾」を避けやうとする點に於て一致する。兩者の相提携する、亦宜なるかなだ。

所謂既成宗教を離れた宗教がある――と人は云ふ。がやはり、宗教である限り、それは既成宗教の形式だけを離れたものに過ぎない。單に既成宗教のブローカーと離れ、既成宗教の形式を離れたことは、彼が既成宗教の中から脫し切つたことにはならない。如何なる宗教も、その古い、新しいとを問はず、根本に於て同一である。そして宗教は、その如何を問はず、現代に全く無用なる一長物である。自分は絕對に之を排する。

言葉の上から、或ひは論理の遊戲の上から、宗教と無宗教とを混同するものがある。共產主義、無政府主義も亦一の宗教であるとなすが如き、これである。彼等は、「君は無宗教者だと云つても、無宗教といふ一個の宗教を持つてゐるではないか」と云ひ、「共產主義、無政府主義を信ずることも、要するに宗教を信ずるのと同じではないか」と云ふ。頗る尤もらしい言葉である。然し、自分は、自分の持つ信念を宗教の名によりて瀆したくないのだ。さうだ、宗教の名は瀆れたる名である!

或る種の藝術と宗教とが、最も良く一致する點は、共に人間の罪惡や不幸を、人間そのものゝ性に歸着し、何故に斯の如き罪惡や不幸が釀成されるかの、根本に觸れない點である。共に空漠なる愛によつてこの罪惡や不幸を失くし得るものとなす點である。其處に、所謂人道主義、理想主義の藝術がある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

眞の人類愛が、現實に行なはれ得る前には、先づ憎しみに徹しなければならない。革命は憎しみの徹した曉に來る。逃避的愛は革命の敵である。自分は憎しみを讃美する。

「我」が主である。「神」によつて「我」を縛り・敎憲によつて「我」を縛らうとする宗教に對して、「我」に目ざめたものが反逆するのは極めて當然のことだ。

アテイストの本領は主我である。

—五・一〇—

讀者諸君にお詫び（リフレットに就て）

五月號に附錄としたリフレット・トロツキーの小說は再版を發行したが不足を生じたので雜誌のなかにはさまれてなかつたのを買つた讀者もおありのことゝ思ひます。さうゆう方は申込んでいただけばすぐにお送り致します。

シベリア通信

「赤衛軍の非禮」と「反日本の民衆運動」

エフゲネフカ、スイヤギノの方面に於ける、赤衛軍の非禮(?)を怒つて勘忍袋の緒を切り開いて突撃した日本軍は、雪解けの泥濘と戰ひつゝやう／＼シマコフへ着いたさうだが、其後將士の意氣昂然たりとの報告だけで何等の進涉をも聞かないがどうしたものだらう。

それにつけても思ひ出すのは、往年のニコライエフスク港事件である。あの大殘虐の原因は未だ世人のもとへは一切不明たゞ赤衛軍の非禮とのみ言はれてゐる。日本軍が其後復仇を遂げて尼港に入つた時發見された其當時の唯一の記錄として殘されたのは尼港軍用通信所の日誌だ。それによれば、赤白兩軍の戰闘に對して日本軍は中立を宣告した、そこで尼港を占領した赤衛軍はその中立の確實を守らせる爲武器の借用を日本軍に申込んだ。日本軍は其非禮を怒つて遂に赤、日交戰となつた、尼港の日本人虐殺や市街燒拂ひの大部分は兩軍の砲火と鮮人、支那人團の爲めであり露西亞人も大部分死屍となつてゐたがその露西亞人の殺されたものゝ大部分は再び尼港へ入つた日本の仇打隊が尼港入り早早ロシア人と見れば誰彼の差別なしに殺した結果である。その證據には現在でも尼港附近のロシア人は日本軍にはお茶一つ出さない。その非禮や殘虐横慕が何處から來たかも知らず尼港事件を持ち出して大連會議を破烈さしたことは何の故だか明か、に知られると同時に、尼港事件によつてチタを攻める者がまだ世間に而もプロレタリアの中にも含まれてゐるときは隨分お目出度い分だ。

今度の赤衛軍の非禮(?)から開かれた戰闘も尼港事件の様に數多の吾々の兄弟だけが加つてゐる。又再びあんなことにならねばよいが……

如何に日本で盛んな巧妙な宣傳をしてゐても西比利亞では擧つて反對してゐるのを見ても所謂非禮の本體が知れる、スレーテンスク市では二千人以上

の市民が參加した日本軍の沿海州に於ける新攻擊に反對大示威運動が開催せられた。ウェルフネ市に於ても四月七日國民館で反日本集會を催ふし熱烈なる演說の後軍人、勞働者、市民から成る大デモンステレーションが催ふされた。無論チタ市に於ては日本のこの新らしき背信行爲の報導は深く人心を激昻せしめ四月八日職業同盟會員及軍隊の一部は赤色旗を振りかざして行路をねり步き、共同墓地に於て一大集會を催ふして日本行動反對の抗議文を決議した。

これでも西比利亞の事態不安定の爲め若干日本人の生命財産保護の爲め撤兵出來ないとて多數プロレタリアの生命を奪ふことが出來やうか。

極東建國記念祝賀會

六月迄には極東共和國が勞農ロシアに併合せられ事實上、國民議會の選擧の必要が無くなるから、といふ理由を日本から頂戴して四月二十七日に行はれる選擧を六月迄延期したチタ政府では、去四月六日極東共和國開國二週年紀念祝賀會を北京南長安街の公署で催した。當日は各國公使館代表や内外新聞社代表の參列を見たが、日本側だけ招待が無かつたとは面黑い。

チタ政府代表ポコディーン氏は極東共和國開國以來二年共今日あるを得たるは吾國民の一致せる努力あるも、勞農共和國が、吾人の自決の爲、領土の一部を獨立の一共和國として喜んで認容せるのみならず種々不斷の扶助を與へたこと永く忘るべからざることである」云々といふてゐる。

勞農ロシア代表パイプス氏曰く「極東共和國成立當時勞農ロシアは内部不整頓の爲め共和國人民の自決自治によつて外侮に當らんことを希ふてゐるものゝ未だ充分の援助を盡す能はず、實に慚愧に堪えず。吾人は本國人民と共に極東共和國今後の發展に對し協助を出來るだけ致さん」と。

倘米國公使館附武官某氏は「はじめ右國シベリアに出兵當時吾兵又派せられたとはいひ因より寸毫の野心なかりき故に秩序稍復すると見るや吾れは率先撤兵を斷行した。吾々は滿腔の同情を以て健全なる極東共和國の發展を希ふ」と述べたのは、ソンジョ其處等の人が聞いたら何んと云ふであらう。

第三インタナショナリストの國際大會は開會四日にして次回準備委員三名を選擧し完全なる協定成立せり。國際資本主義反對、無職者擁護、八時間勞働主張、露國革命擁護饑饉救濟、露國との關係復活の爲四月二十日一大示威運動を催す。(四月十日チタ發)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

論叢

「未明」管見

亮平老史

小川未明が文壇に顔を出してから、今では既に約二十年になる。その二十年間、絶えず心血を濺いで努力し續けた來た結果は、今日では等身の著作となつて、吾々の眼前に積まれてゐる。彼と同時に、或はそれよりもずつと遲くれて文壇に出た人々も、今や文壇の地平線下に沒し去らうとしてゐる。それにも拘らず小川未明の名が依然として、文壇の一角に特殊な光輝を嚴存してゐる事實は、抑々何を語るものであらうか。

今日から數へて、約十年の昔、自然主義の文學が我國の文壇を風靡してゐた頃の、小川未明の窮迫は實に甚だしいものであつた。長年の親友すらも、彼の爲めに批評を書くことを避けた。それでころか、彼の畫いたものに依ると、嘗ては手を握り合つて親しく語つた友人すらも、往來で彼の顔を見ると急に横町へ匿れて彼を避けたと云はれてゐる。この窮迫時代の彼の一家は、その窮乏の程度は想像だも出來難い程、彼の長男(先年病歿した)は營養不良に陥つて蒼眞になつた、そして彼がこの苦悩を慰める唯一の避難所は、牛込神樂坂の武田書店の番頭某(これも先年病歿した)と畫のことを語るのだあつたらしく、その當時に彼が世に發表した短編の數多くに、この人物を繰返へしモデルとして描いてゐる。實際、彼の窮迫時代には一人として彼の身邊に近づくものもなく、寧ろ彼の操守の嚴なるを笑ふ者はあつても、その爲めに彼の節操を賞嘆する程の明あるものはゐなかつたのである。然し彼は世と妥協し、批評家と妥協することをしなかつた。如何なる艱難にも、嘲笑にも、一歩も讓らず、一歩も曲がらずに、唯々自分の信じる所に向つて直往驀進した。その結果は更に窮乏であつた。然しその結果は益々彼を勇敢にした。彼は馬車馬のやうだと笑はれながらも、一歩も躊躇する所なく前方に向つて突進した。その當時の彼にとつては、藝術は一切であつた。「藝術」の名が彼に必死的の勇氣を與へた。未明の前期の代表

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

作と云はれてゐる「魯鈍な猫」を讀めば、その頃の未明の生活並に彼の思想を明かに掴むことが出來る。この「魯鈍な猫」あたりを轉機として、彼の作風が次第に變化して來たのである。

嘗て小川未明はメエテルリンクを愛讀し、ソログープを愛讀した。彼の素質にはこれらの作家の持つ美に對する熱情、美の世界に對する憧憬の結果、現代の醜惡な世想かを閉じやうとする無政府主者的な傾向があつた。そこに彼ら眼の神秘主義的な作品の數多くが生れた。「闇」と云ふ小さな短編集中に收められてゐる小品の悉くは、その好個の例である。彼はこの夢幻の世界に沒頭して、現實さを忘れやうとしたのであるが、然し彼は果してそれを爲し得られたであらうか。

夢の世界、童話の世界は今日と雖も、彼の所有してゐる世界である。彼は本質的に、その大小の差こそあれ、眞に「詩人として」生れた者である。彼の作品が詩である時に、吾々はそのなかに引き入れられて行く、然しその作品が理窟である時に、吾々には彼から遠く離れて行くのを感ずる彼の社會革命論を左程に重大視せぬ人達も、彼の藝術の持つ魅力には否應なしに引き入れられる。そこに小川未明の强さがある。これは何處からか來るか。とりもなほさず彼の眞摯な生活態度から來るのである。窮乏と闘ひ、迫害に抗し、總べての友人から見棄てられても、尚自分の主義主張を曲げることを肯んじなかつた、彼の誠實から來るのである。小川未明の作品を讀む時に、忘れてならないことは彼の生活態度である。彼に於ては術術は即ち生活である。彼ほど正直に自分のことを書く作家を、僕はまだ知らない。彼の正直さ、誠實さは小兒の如く誠實であり正直である。彼に於ては社會問題を論ずるのと骨董品を愛玩するのとが、何等不調和を感じない。一切のものが小川未明の持つ詩的ムードのなかに渾然と包まれてゐる。彼は我國に於けるウキリアム・モリスである。そこに大小の差こそあれ、小川未明は藝術的無政府主義者である。

前にも云つた通り、彼の作品傾向は彼の前期の名作「魯鈍な猫」を轉機として、次第にソシアリスティックに傾いて來た。そして初期の如き童話風の色彩が次第に薄れて、生々しい現實苦を示すやうになつて來た。然しその現實苦の描寫と雖も他の作家とは全然異つた未明式の現實苦の世

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

界である。そこには物質に虐げられた人類苦の世界の描寫があり、運命に呪はれた受難者の描寫があり、然かも作者はそれを描くまゝに止まらず、尙ほ進んでそれらの不合理に反省を求め、反抗を示してゐる。更に一步を進めては、破壞を要求してゐる。とは云へ小川未明はロマンチストである。「血に染む夕陽」を眺めて革命を想ふ詩人である。越後春日山に故鄕の英雄上杉謙信を祭つて、自ら其の神官となつた父の血を繼承したロマンチストである。純眞無垢な性情と、その性情から產れた彼の藝術は、眞に北海の浪の底から拾ひ上げた一粒の眞珠のやうなものである。

老書生の如き容貌、素朴なる風彩、簡素な生活——二十年の間、絕えず鬪爭し續けて來た未明。尙ほ今後幾十年かをも鬪爭し續けるであらう未明。僕はこの小川未明の過去の鬪爭的生活に尊敬の頭を垂れると共に、尙ほ未來の彼の姿にも無限の懷しみを持つて見守らんとするものである。恐らく彼は現もさうであるが如くに、最後の日まで「永遠の兒童性」を保有してゐるであらう。そして彼の藝術も彼と同じく「永遠の兒童性」を表現してゐるであらう。二十年間の惡戰苦鬪にも拘らず、この「兒童性」を失はなかつた小川未明こそは、眞に「生れながらの詩人」である。

僕が始めて小川未明と會つたのは、忘れもしない明治四十五年の五月はじめの日であつた。當時、彼は雜司ケ谷の寓居に病後の身體を養つてゐた。そして昨日退院して來たばかりだ、と云つた。僕は彼から靜かな森のなかに他の樹木から獨り離れて立つてゐる、何かの若樹を見るやうな感じを受けた。それは病後の衰弱もあつたのであらうが、靜かなつつましい、淚ぐむやうな優しさであつた。いまでも僕は彼の心の底には、このつゝましい優しさ、靜けさ、そして謙遜な心が潛んでゐると確信してゐる。彼をさうでないと主張してゐる人人は、まだ小川未明の底にまで觸れないで、彼から離れ去つた人達の言である。彼ほどに親しみのある人はない、彼ほどに素遠な心を持つてゐる人はない。それと同時に彼ほどに燃え易い人はない。燃え易いが故に他人の思惑なんか省みる暇もなく、自己の所信を披瀝する。そして一步を讓ることなく、頑強にそれを主張する。時にはそれが理否を越えてまでも、相手に肉迫する。その時多くの人は未明から離れ去つて、遠くから彼に就て云々する。しかし多くの人達は、眞の未明、親しみ愛し尊敬すべき未明の姿は、この肉迫戰を更に超り越した彼方にあることを知らない。彼の作品を讀む程の人達は、この肉追戰後

の未明の姿を　その作品から摑まなければ、小川未明の作品は「死んだもの」も同然である。多くの小川未明の藝術を輕んじやうとする人達は、やはり「人としての」小川未明の眞實を摑む勇氣と智力とがなくして、中途から遠く離れ去つて、未明を云々してゐる人達と同樣のことを繰返へしてゐるのである。

今年のメーデの日に、芝浦の集合地で小川未明の姿を見た。多くの勞働者の群に交つて立つてゐる彼の姿は、決して不調和を感じさせない程に、周圍に親しみのあるものであつた。あれが若しもボヘミヤンネクタイを結んだ久米正雄であつたら、何うだらう。または里見、芥川、菊地のやうな人達だつたら、何うだらう。僕はその時の情景を想像して、噴飯に堪えないものがある。あの時に友愛會の鈴木文治氏とわが小川未明とが、最初の會見をした刹那の寫眞を撮つて置きたかつた。あの刹那の小川未明の動作表情こそ、まつたく純一無雜の小川未明であつた。小兒のやうな歡び、晴々とした笑聲。しかもその歡聲は、一轉して憤怒となる性質を有つてゐる。示威行列が行進を初めるや否や忽ち官憲は勞働者を檢束しはじめた。彼の今までの歡びは忽ち憤怒となり、哀痛と變つた。然しながら彼の憤りは、それを直ちに行動に表現する迄には至らなかつた。そこに彼が藝術家であつた、それ以外の何者でもないことを示してゐる。この點に於て同じ傾向を持つ作家でありながら、秋田雨雀と小川未明との距離のある所であり、雨雀が檢束されたに拘らず、未明の檢束されなかつた理由でもある。然しながら僕はこの點に於て、未明に一味の飽足らなさを感じずにはゐられない。藝術で創作のペンを持つと同樣に街頭でも檢束されて行かうとする勞働者の手を握つて欲しかつた。生活が藝術に表現されると同時に、藝術をも生活に表現して欲しいと思つた。

彼が最近の著作『血に染む夕陽』は、彼の舊稿の二三と共に、新しい長編作「谷に攀ずる」だの「虚を狙ふ」だのと云ふのが收められてゐる。そこに小川未明の主義的思想や行動が描かれてゐる。讀者はそれに依つて、最近の彼のことを知ることが出來る。僕の希望する所は、未明が「夢の世界」をすてて、街頭の宣傳者　思想の行商人として、藝術にも生活にも、白熱し來らんことである。僕が最も恐れる人格は老年に近づくに從つて、益々過激になる人格者である。さうしてわが小川未明も、さうした人格者の一人であらん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ことを、僕は專心祈つてゐる者である。

今日では總べて身邊から退けて終つたらしいが、未明は將棋を好み、壺や錦繪を愛玩し、盆栽を樂んだこと、酒を愛したと同程度であつた。しかも、これらの總べてと、彼の社會問題の研究や、社會主義的思想との間に、何等の矛盾を彼は感じてゐない。また他人も同樣に彼の前にあつて萬國の勞働運動や社會主義運動を語りながら、壺や將棋の話をして、心中に何等の矛盾感が起つて來ない。何故なら未明が社會問題を語る時も、壺の話に耳傾ける時も、同じく彼は熱心に語り、熱心に傾聽してゐるからである。彼の前では、時に科學も力を失ひ、論理學も不必要となつて來る。唯、そこに存在するものは、熱情だけである。熱情がそれ以外の一切のものゝ存在を奪つて終ふのである。

僕は最も興味あるエピソードの一つを擧げて、この管見の最後を飾らうと思ふ。

何年何月であつたか、それは忘れて終つた。またそんな必要なことでもない。或年の或月、牛込の某寄席に越後の「おけさ節」一行がかかつたので、僕は未明に誘はれて連れて行かれた。未明は「おけさ節」の踊りの間は、默つて聽いてゐたが、軈てそれが終つて、清元だとか、長唄、新内等になつて來ると、折角連れて來た僕に「歸らう」を連發してゐたが、間もなく大鼾をかいて熟睡して終つた。周圍からは、シツシツと盛に聲がかかるにも拘らず本人は、大鼾で睡つて居て仲々に眼を覺しさうもない。困りぬいた揚句に漸く起して戶外へ連れ出すと、未明の曰はく『あんなものが面白いのかね。そんなことぢや君は駄目だよ。』まるで自分が無理に僕に連れて行かれたやうな口吻である。そして二人はヤマニ酒場へ入つたのであるが、此處に小川未明の尊敬すべき點があるのである。これを矛盾だと思ふ者は、未だ小川未明を知らないのである。尊敬すべき永遠の兒童を知らないのである。

貧乏でも人にゆづらぬことを常に自慢とする孝丸、友人の不幸を聞いて、洋文以上の心配、考の果て『中央公論』社に驅け込んで取敢ず六月の稿料を支拂つてもらつて一と安心。いつも口さがなき小牧「洋文「犬」に救はるかな。」(赤峯)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大阪と神戸の講演會

（自分だけの感想）

金子洋文

一

大阪の講演會は見事に失敗した。原因はいろいろあるが、官憲の壓迫もその一つだ。本屋にはつたポスターをとつたりなどしたらしい。それに時日が接迫してゐたため新聞に提灯を持つてもらうことが全く出來なかつたらしい。

それはそれとして、一番いけなかつたことは、大阪と神戸の講演會が同日同刻にかち合つたことだ、そのために主催者の心勞は並大抵ではなかつたし、講演する吾々もどんなに骨折れたか知れない。一つの講演を終へると休む暇もなく電車や自動車にのつて大阪から神戸へ、神戸から大阪へと駈けつけなければならなかつた。自分と平林は神戸を初めにやり、村松と佐々木は大阪の方を先にやつて神戸へ駈けつけた。この時間が思ふ通りいかないので、言葉を換へて言へば、文明の機關が吾々の思ふ通りにいかなかつたので、非常な喰違ひを生じたわけだ。

神戸では自分は戯曲作家論をやつたが、この時聽集は七百人位ゐたやうであつた。宣傳がうまく行つたらもつとはいつたと思はれる。

賀川豐彦氏や倉田百三氏のもてゝゐる神戸で、自分はかなり兩氏の作品をけなしつけた。

『而し倉田百三氏の作品は賀川氏のものとくらべると、まだ〳〵段違にいゝ、賀川氏の『死線を越えて』は大正文壇に於ける愚作の好手本である』と言つたら、拍手と喝采が堂にあふれた。

自分は意外に思つた。にせ物はこんなに早くはげやすいものかと今更におどろいた。

而し神戸の聽集には活氣がなかつた。皮相な觀察かも知れないが、神戸の青年は餘りにクリスチャンであつた。生々したものが見えない。贊成でもいゝ反對でもいゝ潑溂としたものが見えないそれが物足りなかつた。たゞ熱心にきいてくれたのはうれしかつた。東京でよく見うける初めから馬鹿にした顔が見えなかつた。

二

講演を終へたらへト〳〵になつた又大阪へ行つて、全く違つた演題で話すのかと思つたら、いやになつた。

が、阪急の電車の中で醉つぱらつた相撲取りの下劣なほうかん振りを見たり、藝者といゝ年寄とが引つぱつたり、おしたり、めくつたりするのを見てゐたら、急にムカ〳〵となつてきた、（そんなことをやく必要はないのだが、どうも性分だ）おかげでだらけた氣持が緊張し出した。

梅田で下りてすぐタクシーで天王寺の公會堂に駈けつけた。皆待つてゐた。平林が時間をつなぐためにシドロモドロにやつてゐる。

なあんだ、聽集僅かに七八十位、その半分が刑事さんだからます〳〵おどろく。

而し、天王寺公會堂は實に氣持がよかつた。神戸の青年會館と違つて低い聲でもピン〳〵ひゞいた。私はいゝ氣持になつて話し出した。

異端座の馴染の顔が方々に見える、すぐ眼の下に、この講演會にふさはしくない上品な奥さんが眞面目な顔をして控へてゐる。その横に若いお孃さんが二人ならんでゐる。それは音樂會に見る

感じである。あとで紹介されてまたおどろいた。この人達は社會主義者として大阪で知られてゐる佐藤氏の奥さんと娘さんであつた。

『年は二十一、大阪の堺眞柄ですよ。』ときかされて、自分はヘエと言つて氣持よく微笑んだ。

講演は氣持よく進んだ。

『處女とか童貞とかいふのは、センチメンタルです。』と言つて若い顔をされると思つたら、パチ〳〵一齊に拍手がきた。おや〳〵(これで見ると大阪の人はなか〳〵あぶない)小さい妹さんが、小さい姉さんを肱でつつついてゐるのがチラと眼にはいつた。

場内を見渡すと、三人ばかりの人がせつせと筆記をしてゐる。警察の書記さんだな、と思つた。が、その內、すぐ前の中央の椅子にゐる、まだ二十にもならない一人の筆記者が、鉛筆を持つたまゝ實に元氣よく拍手する。如何にも愉快さうである。

『何者だらう』自分は不思議に思ひながら、何だか非常に氣持よかつた。これが佐藤氏の息子さんだつたのだ。

もういゝ加減しやべつた。

『空想社會は何うして來るか、我々は何うしなければならないかそれは言外にある。諸君の胸の內にある筈である。』

これで講演はおしまひになつた。

自分は大阪でも神戶でも、時間の都合で『洗濯屋と詩人』の上演を見ることが出來なかつた。實に殘念だつた。

大阪の道頓堀は實に氣持よかつた。着いた夜、道頓堀のカフエで、大阪のいろ〳〵な人々と會つて話したことは今度の旅の大きな歡びの一つであつた。大阪の若い人達は有望だと思つた。

種蒔き社地方講演會

主義の主張は字句の上から許りでは何にもならない。そのことは種蒔き社の常に感じてゐたところであつたが、こん度四月の講習會が濟んだら、執筆家諸氏の後援を得、積極的に活動することとし地方で文藝講演會を開くことにした。地方の讀者が壓迫されることに對しても、種蒔き社は默つて居らない。種蒔き社は地方同志の申込に應ずる。

（係）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

批評

青年將校の觀たる西伯利

出征軍の實狀

「中央公論」五月號の「時論」に於て吉野博士は西泊利出征軍中の親しい友人からの音信なるものゝ大要を摘錄してゐる。博士の目的は氏の友人であるところの眞面目な青年將校が出征と駐兵とを如何に觀じ、又軍事諸制度の上に何樣の改革意見を有するかを第三者の地位から一般の讀者に紹介するにあるらしい。はつきり言つて置くが、僕は次ぎにその音信なるものが讀者の立場としての僕に何ものを與へたかをありのまゝに言ふことを目的とする。そして、それが爲めに僕は僕が讀んでゐる中に朱線を引いた文句そのまゝを以下羅列することはあらゆる意味に於て一番無難なことだと考へられる。

吉野博士の青年將校なるものゝ音信は都合五信より成つてゐる。そして、その一つ一つは僕に何を考へさせたか。僕は順序として第一信から始める。

イ、第一に兵士などは何の爲めに出征したのかを殆んど全く理解して居ない。次ぎに國民的後援の方はと言へば、多數同胞は寧ろ出征の無意義を唱へてゐる有樣である。

ロ、西伯利に於ける我が軍人の行爲は、何と辯護しても決して勇敢と稱すること能はざるは、公知の事實である。

ハ、さる高級武官は、這般の現象を說明して物質文明の旺になつた結果だと云はれたさうだが、私は單に夫れだけではないと思ふ。歸する所は、戰爭の意義に對する理解と感激？とを缺くからではあるまいか。(以上第一信)

ニ、凡そ相手のない戰爭ほどやりにくいものはない。

ホ、外の誰から賴まれたといふでもなく、謂はゞ周圍の非難に拘らず勝手に出兵して居るだけ、さう手嚴しい手段に出ることも出來ないといふ羽目にある。

ヘ、彼等(最高幹部)は口癖の樣にいふ。敵にやられたか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らとて止めては國軍の名譽に關すると。馬鹿〳〵しい馬賊やパルチザンに勝つたつて何が名譽か。

ト、而して今日の制度は、集團的奮闘に對して國家の與ふる報酬の大部分を、上長官の一人占めに歸せしめて居る。之が自ら因をなして、下級軍人が上官功名心の滿足の爲に無遠慮に犧牲にさるゝことになる。此點宛も資本家の勞働搾取と異曲同巧である。（以上第二信）

チ、殊に今度の樣な政略的な出兵に於ては、云々。

リ、遂に彼等は本音を吐いていふ。今日この儘西伯利を撤退するのは武士道の恥辱だと。

ヌ、又彼等（右黨側）を援けることがどれ丈け露西亞の爲になるか。

ル、例へば夫のラングトン事件にした所が、本當の原因は國際的精神の乏しい所から起つた事なのだ。當時多くの將校連は『相手が米國人だからあんな面倒な事件になつたのだが、あれが露西亞人や支那人であつたら文句はなかつたのだ』と云ひ合つた　、即ちこゝだ。

ヲ、故にラングトン事件以前にも、隨分類似の事件はあつたのだ私の知つて居る所でも、歩哨が無害な露人を射殺したり、又少くとも傷けた例は尠からずある。餘り亂暴だといふので憲兵が飛び出し、之に對して隊の方では正當防衛だと抗辨して、調爭數次に及んだといふのもある。

ワ、夫れだから兵卒の中には、支那人や露西亞人を殺すのを面白半分に考へ、我から其機會の到るのを待つといふ樣なものも出て來るのだ。（以上第三信）

カ、私は會て西伯利から還つた兵卒に其の僞らざる所感を尋ねたことがある。彼等の異口同音に答ふる所は、『兵卒といふ者のつまらぬ者だといふことを、今度しみじみ感じさせられました』と云ふのであつた。何故かと問へば『將校方があんな贅澤をして居るのに、我々のみ散々苦しい仕事をさせられるからです』と云ふのであつた。

ヨ、私はこんな話をきいた。市の警戒に任じて居た歩哨が、眞夜中ブラ〳〵和服姿で通る醉漢があるので誰何すると、『おれだ！　おれだ！』と平氣で居る。『おれでは判らん』といふて捕へて見ると、豈圖らんや自分とこの中隊長であつたそうだ。之が翌日眞面目な顏して精神敎育を云々するのだから呆れるではないか。

タ、某高級將官は嘗て、今度の出兵には成るべく全國の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

師團をまんべんなく出征させて平均に恩典に與らせたいと云つたさうだ。餘程公平な積りで得意らしかつたといふが、考へて見ると、丸で戰爭を商賣視して居るものと謂ふべきだ。

一レ・孰れにしても、こんな少額の金(遺族扶助料をいふ)と家の大黑柱との交換では、畢竟死ぬ丈損だといふことにならざるを得ない。斯くも猶國家の爲に身命を擲てと求むるのは無理では無からうか。(第四信)

第五信は主として軍紀の問題といふ、むしろ制度の上に亙る改革意見であるから、こゝらで打切ることにするが、書拔をして行くとざつと上記のやうなことになる。僕はそれについて一つ一つ批判を試みやうとするものではない。それはあまりに解り切つたことである。僕らにとつて軍紀改革は問題ではない、西伯利の出兵が問題なのだ。この大問題を、見逃して僕らにロシア承認を叫ぶ資格があるだらうか、どうか。それを思ふ時、僕らはこれ以上、このまゝ默つて居られないことを痛切に感ぜられる。(小牧)

平林氏『最後の幻覺』(文化主義者に與ふ)

――「前衛」五月號――

『馬の耳に念佛』てふ俚諺は、全然融和せざる二概念を結び付けた處にその面白味がある。『馬の耳』と『念佛』だ。支配階級と被支配階級とは當然對抗の地位に立つ。何等の融合點はない。支配階級の代辨者――文化主義者、新理想主義者、トヨヒコ會社員、モモゾウ會社員・サネアツ會社員etc.――の『耳』に取つては、彼等に對する被支配階級の如何なる論難も嘲笑も侮蔑も『念佛』以上のものではない筈だ。けれどもこゝに悲しい事實がある。即ち現在日本には未だ『資本主義單純化』が完全に行はれてない事だ。かうして彼等の顧客は主として『馬の耳』と『念佛』の中間にある。『エーテル階級』となる。併しこの『エーテル階級』も歷史の軌道を無視する譯に行かない。右せんか、左せんか、二つのエスカレーターは反對方向に徐々に客を運んでゆく。最近トヨヒコ會社の株大暴落の如きは這回の事情をよく物語るものだ。トヨヒコ會社はまだ破產しない。けれども彼等を打つて一丸となしてゐるシンジゲートにとつては學ぶべき秋がきた。先づ最初の挽回策は『巧みなる廣告術』である。かくして徐々に、或は急激に『最後の幻覺』『最後の蜃氣樓』が始まる。けれども一トヨヒコ會社、一モモゾウ會社、一キクチ會社、一キヨウソン會社は一體何だ? 彼等のシンヂケートは一體何だ? 復興しやうが、破產しやう

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が一體共が何だ？　と云へば夫まで〻ある。けれども彼等の意識的（或は誇張的）無意識的支配階級代辨行爲に最後の引導を渡すのも敢て徒爾ではない。（事實『最後の引導』であつては困る。何故なら少くともそれはある人々殆んど兩階級通じての文人――の Purse に影響すること決して尠少でないから）『前衞』（五月號）所載平林氏の「最後の幻覺」一篇は、彼等に『最後（？）の引導』を最も明瞭に最も痛快に與へたものだ。『歷史の流れを食ひとめやうと』する勇敢な戰士『永遠』に陶醉する幸福者、『自由、平等、博愛、正義』の念に燃ゆる人道主義者――凡ゆる『文化主義者』『人類崇拜主義者』『バン超越主義者』（おお、何と云ふ眩しい光景なことよ！）は今やすつかり素性を現した。僕はこれ以上何等云ひたい事もない。そうだ、僕は平林氏と共にこう叫ばう、『死滅すべき人道文化擁護の十字軍士よ。卿等のエルサレムはその時は一基の記念碑と化し、卿等の文化は博物館の一隅でのみ幅をきかすことになるだらう。卿等の哲學は永遠の眞理を示す代りに「思想變遷史」の二三行を占めることになるだらう。階級文化の爭ひは、無產階級の進行曲と過ぎゆく歷史を引きとめやうとする卿等の悲鳴との爭ひだ。（以下〇〇……）』

平林氏は單に『死滅すべき』『卿等』に引導を渡したものではない。この一篇には色々重大な事が含まれてゐる。こゝに平林氏の深刻な用意がある。同時に『左へ！　左へ！と益々眞理に近づきつゝある』平林氏の面目がよく現れてゐる。所謂「裏衝プロレタリア」に對する氏の見解、所謂「プロタリア・カルチュア」に對する氏の見解、解放運動の『國際化』に對する氏の見解は『最後の幻覺』一篇の主題でないが故に頗る暗示的なものではあるが（これらの方面に關する氏の詳しい見解は他の論文に見るより外ない）又以て氏のインターナショナルなコムミュニスティックな態度を窺はせる。更に氏が階級闘爭の諸徵候を簡單ではあるが日本の例に求められたことは、今まで多くの人によつて試みられてゐることだが、大變氣持よく讀ませた。この方面はまだ〳〵開拓する餘地――否々全然開拓されてないと云つてもいい――があると信ずる。終りに臨んで僕は敬愛する平林氏に對して一言忠言を呈す。曰く、貴下は最早『文化主義者に與』へる必要がない。引導は渡されたのだから。然し彼等にして反駁を試みるものあらば（これも原稿料？貴下は先づ原稿料を手にし得べきや否やを沈思默考し、そのネガテイヴならば宜しく默殺せられよ。（何？　今までも

う實行してきたつて！）（日之樹）

武林氏の近作二篇

武林夢想庵氏の近作、『性慾の觸手』、及び『第十一指の方へ』、共に『改造』で發表されたものゝ單評をする。

今更人の言ひ古しでもあるまいが、この二作から與へられた教訓は、先つ第一番に作品が嘘であるか、本物であるかといふことである。といふと、本物でさへあれば、……と言はれるかも知れんが、縱令ばその人には本物で、精一杯のものであつても、それが全然價値をなさないものゝあることは、誰しも承知してゐることゝ思ふ。五九郎が一生懸命自分の喜劇をやつたからつて、それは五九郎だけのものであつて、それ以上の何物でもないことである。

ところで、武林氏の作の如きは、これは又何うしたものか、その反對の方を一生懸命で書いてゐるやうな氣がするその筆致は自由で、奔放で、調子が高くつて、爾も學問があつて、それで讀んで行くうちに、至るところに嘘があるのは何うしたものか。この二篇とも一つの續きもの小說として讀んでもいゝものであらう　、主題は「私」といふ人のだらしない性慾生活であり、それが一文なしになつた、そしてこれからは一個のプロレタリアになつたので、原稿料で御飯を食べなければならないとか、けれども時々は父親から百圓二百圓は宿料として送つて貰へるやうなプロレタリアであることを書いてあるが、何處を押してからプロレタリア流行の當世とは言ひながら嘘がつけるかと思ふと、今迄武林氏といふ人を想像してゐたのとまるで異つたものを見せられたやうな氣がして、少なからずうんざりして終つた。

「私」と稱する主人公に、何處をおしてプロレタリアらしい自覺があるか、行爲があるか、それにも拘はらす、作者は筆まめにちよつちよとプロレタリアなる文字を文章で書き入れてゐる。其處が氏の尤も缺點である嘘でなくして何であらう。今日のプロレタリアなどゝいふものは、少なくともこんなタガの弛んだ、ふやけた代物ではないであらう——僕は、この作を始めて讀んだ時に、その嘘の度の强いのかと、かうも平氣でその嘘がつけるかと思ふと、人の世の中年の心理、——そんな、兎に角餘り面白くない幻像が胸に浮んで來て淺間敷くさへなつて來たのである。

僕は此處で、順序をたてゝ批評する積りでゐた。が、隨分と方々で言ひ盡されたことではあるし、尙又時はづれの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

感もあるので、餘りの人の言つてなかつた一點だけを此處では言ふことにした。

兎に角、僕に言はすれば、氏の如き嘘が今の文壇では通用してゐることは、一面から見れば或る面白さも感ずるが、兎に角正氣の沙汰とは思はれない。――多事なる哉文壇、亂脈なるかな文壇人！（弘二）

「嵐」を評す

大關柊郎氏作

直截に讀者、又は觀者の頭に這入つて行く點に於ては、小說よりも何よりも劇が一等のやうだ。殊に、今時のやうに悠然とした餘裕もなく、兎に角何かしらせか／＼とした世の中では、讀書三昧に耽つて靜かに味ふといふよりもぴん／＼頭に響くものが欲しくなつて來るのであるから、それは自然の道理かも知れない。只、僕の餘りに劇を稱めたからといつて、小說を輕蔑してゐるのではないから、その點は此處で斷つて置く。――もつと誤解を避けるやうに言ふならば、現在の小說の多くが僕等には何の興味もなく徒らに退窟なので僕にかうしたことを書かせたのかも知れないが、これは論理にはならないので、あの言ひ譯だけは讀者諸君も餘り當てにしない方がいゝ。

と與太つて置いて、我國現在の劇界は、僕の少ない見聞からしても、可なりに物足らぬものであるらしい。所謂座付作者や、「演藝畫報」「新演藝」の御常連のものは問題以下として、普通言はれてゐる大雜誌の類に每月或ひは隔月といふ具合にのせられてゐる中から、現代我國の劇といふものを觀ると、而して、それら一流商賣雜誌の脚本が現代我國の劇藝術の生んだ花であることを思ふと、僕等は餘りに心細いことを感ずる。

藝術は階級を超越したものだとか、劇の本態は矢張り寫實主義にあるとか、浪漫主義でなければ不可いとか、ゴルスオーシーとイエーツの喧嘩みたいなことを言つて、茶道や生花の宗家みたいに定義を造らへやうとする形態のみの世界は、僕等には餘りに緣遠きものである。話が外にそれるやうだが、先日のこと農商務省の佛國現代美術展覽會を見て、今更殊新らしく感じたことだが、佛蘭西の繪が上野の展覽會などゝ比較して（或る心理も勿論這入つてゐたことだらうが）うんとこさと氣持がよかつたのは事實であるところで、餘り日本の美術家や美術批評家から稱められなかつた、ブラマンクの『白い壺の花束』が好きだつた僕には

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（但し佛蘭西でブラマンクが一番好きだといふ意味ではない。日本人にお馴染のロダンや、モーリス・ドニーや、アンリー・マルタンなど、その繪が如何に完成されてゐても如何に精練されてゐても、彼等が自然から受ける感じ、內容、――といつても餘りに抽象的になるといふなら具體的に言ふが、餘りに性慾的なロダン、餘りに甘い美の探求者ドニー、マルタン等 僕等には何うして共鳴が出來やう。畫家の立場と文學者との立場は勿論多少の差異はある。表現の差異はある。人に訴へる方法の差異はある。が、その人が自然から受ける氣持といふものは同じである。その意味に於て、アンリーオットマンの繪が近代的で形態も新らしく筆致も簡潔であり、浮薄であるか、日本人間の評判に比して思ひ半ばに過ぎるものがあらう。其他、これ等の中には詠嘆的なものもあれば、享樂的なものもあり、種々樣々であるが、僕等が今後の美術界に於て前途を期待して止まざるアンデパンダンの畫家の名が見えないこの展覽會にしてもが、その一部の若手らしい人の作品の中に、その描かれた畫面から大戰後の佛蘭西の人々の混亂した生活から反撥してゐるらしい 重壓の空氣を押し脫けやうとしてゐるそれは恰も奧の挑ねるやうな生氣が覗はれるのである。

この狀態は現時の日本の文壇、ひいては劇壇にも覗はれる氣持である。逃辯的な倉田百三、新運動に足を入れてゐるやうで案外さうでない菊池寬、その上通俗味といふ致命的な藝術の所有者である彼をオットマンと批較するのは僕の謬見であらうか。そんな中からやうやく新芽を出して、雄々しくも現代の劇壇に戰鬪を挑むものは、ほんの少數であり、且つそれも何の程度までゝあるかは未だ頓かに斷言出來ないのである。

僕は今大關格郎氏の劇集『嵐』の批評を書するに當つて、以上のやうな變な譬へを引いたのであるが、然らば『嵐』は何うかといふに、前記倉田百三氏や菊池寬氏があれだけの地位に於かれてゐる世の中ならば、大關氏のものはより一段と高い方に（そんなことは何うでもいゝが）置かれて然るべきものだと思ふ。これだけのことは斷言出來る『嵐』の中には「嵐」「宣傳」、「應接室の女」、の三篇を集められてゐるのであるが、氏の力作である四幕物「嵐」よりも、「宣傳」及び「應接室の女」の方により多くの共鳴を感ずるものである。「宣傳」の方は如何にも田舍の而もなり立ての巡査らしい、そして警察とその町の有力と結びついてゐる有樣、或ひは些末のことに神經を尖らして大綱を忘れる下廻り、そ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れから警察が遂ひに民衆保全の爲めではなくつて、返つて民衆とは相容れざるものである狀景がよく描かれてゐると思ふ。それに反撥する亭主は矢張り生きた人間だ。

又「應接室の女」は「嵐」の續篇とでもいふべきものであらうが、此處には一人の或る意味での戀愛至上主義者の悲哀が描かれてゐる。總じて悲哀は人の心を動かすものであるが、そしてそれがセンチメンタリズムに墮しない時に於て相當の價値を認むべきものだらうと思ふ。

「嵐」は白蓮問題を思ひ當つるものである。此處に作者の爲に斷つて置かねばならぬことは、この作がもう數年以前に書かれたものであることだ。無自覺に結婚したものが、自覺した後に反撥するのである。そして其處にはミリタリストの頑迷と舊式道德とを嗤つてゐる。が、作者は勿論それを知つてゐるのであらうが、「嵐」の結說は遂に「應接の女」とならざるを得ない點に於て、宮崎龍介君對白蓮問題に思ひ當る節が多い。大關氏が「應接間の女」を書くことを知らなかつたならば、「嵐」の價値は今よりも半限さるべきものであるので、この點は大關氏の偉いところであると言はねばならない。そのとほりに嵐の中の思想家冬木は、所謂思想家であつて、僕等には何の共鳴をも感じない。もつと具體的に言ふならば、生活に苦勞のない新らしい運動に理解、同情のある、そして上流階級の間に空氣を批判するだけの思想家らしい點に於て、我國現在の多くの思想家と何等選ぶところのないものである。それほどに、この劇では舊道德と鬪つてありながら、僕等の頭には、その鬪つてゐる思想家及び當面の妙子夫人をさへ、總べてをひつくるめて鬪はねばならないのではないかといふ感じを受けるのである。

以上で、氏の作品の大體の空氣だけは說明した積りである。氏には段々と「宣傳」のやうな作を書く心持が動いてゐるらしい。僕等はこの點に氏の進路を期待し、又期待せねばならぬものであるが、今度は多く言ふことを止めて、次の戲曲集の出ることを期待して待つことにしやう。

終はりに、言ひ忘れたことを言つて置くが、氏は描寫に於て、兎に角一氣に讀ませるだけの技倆の所有者である。この點、世の所謂何とか至上主義者に一言申し述べて置く――多忙と、性來の粗忽から、餘りに粗笨な批評であつたことを、作者及び讀者諸氏にお斷りして置く。(弘二)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

映畫 默示錄の四騎士

――淺草帝國館――

この映畫を觀て先づ感ずることは、最初から最後まで愛國の激狂者と、非愛國主義者の興奮が二つとし水際立つたほど明瞭に分かれることである。それだけ「默示錄の四騎士」は僕らの胸心にあるものを注ぎ込む。その意味に於て映畫としては先づ成功の方か。最も、殊更らにドイツ人を表はすためのグロテスク毒どい表現や、露人チェルーフのあまりに芝居めいたところは多少胸を惡くした程であつたが。それはそうとして、とにかく、一般の觀客が、あれだけ戰爭は呪ふ可きものであるといふことを眼の前に見せつけられてゐるのに、いざ兵隊が出ると、割れん許りの喝采をしたり、サロンのいゝのらくら者たちの前でラ・マルセイエーズを歌ふとそれに醉つて見たりする群衆心理はたしかに生れ落ちるからつめ込められた資本主義擁護のための愛國思想の魔の手がどれ程根強く正直な民衆に根ざしてゐるかがよく解かる。そして、そうであればある程 又、そうであるがために、[illegible]帝國館のマルセイエーズを聞いて熱狂してゐる人たちにせめてトロツキイの「デクレエルの一家」を讀ましてやりたかつた。僕はあの映畫を見て、一九一四年八月、出征當時の悲壯なありさまが再び眼の前で見るやうな氣がした。ひとりの辨士、ひとりの觀客があの樣を見て、フランス人も、まだ、ドイツ人も誰のために、何のために戰爭をするかを冷靜に考へてくれる人がないものか。ジュリオの父マルセル・デーアェが今から四十幾年前普佛戰爭の際、戰爭を呪ひ祖國を脫れて來た心情に拍手してくれるものがひとりもないが、その子がフランスのために出征する時、雷の如き拍手が起る。何といふ淺ましいことだ。ジュリオの父が伜の墓參りに來て語る。「たゞ愛のみが榮える時が來る迄は人道を踏みにぢり・世界をかき亂すであらう。」と何といふ待遠しいことだらう。世界に資本主義といふ不淨なものがある間そんな愛など何日になつて來るものか。

「岡寺の觀音」が「默示錄の四騎士」の後で映ぜられたら、觀衆は明瞭に戰爭は何人のために利用されてゐるかゞ判つであらう。主人公ハーランドはたしかに戰爭成金の曲型だと思ふ。情もなき吸血兒の如き守錢奴も金があるために、ヘレン・スコトと呼ぶ心がけのやさしい看護婦を雇ふことも出來たし、人間をすべての苦から救つてくれる慈悲の女

神は岡寺の觀音を七千リラで買占めることが出來、それによつて、不淨の身が救はれた。かうなると地獄の沙汰も金次第か。辨士並に觀客諸君・諸君の同情するジュリオも、また、ハーランドも勝手放題の生活をして來た人々だ。しかしこの世の中に、無慘無慘有産階級の機械になつて殺される悲しい名譽の戰死者？ 觀音の慈悲を買へぬ無産者が何人あるかを思へ。（小牧）

×

「默示錄の四騎士」はちつ共感心しなかつた、むしろ不快であつた。あの寫眞は戰爭の謳歌であるばかりでなく、全く出鱈目なプロートだ。不自然きはまる、あの寫眞から無理にいゝところをさがすなら戰爭に對する熱呼を寂しく眺めてゐる三人の顏――！それだけだ。（洋文）

×

「默示錄の四騎士」に就ては、いつか讀賣で長谷川己之吉と云ふ人が、筵捧に讃めてゐたので、わざ／＼淺草へ見に行つたが、思つた程いゝものでなかつたことに失望した。第一役者が、あんまり芝居をし過ぎてゐる。それに最も不快な事には、戰爭を讃美するのか、またはそれを呪つてゐるのか、一寸見當がつかないプロットのごまかし方に立腹した。それからも一つこれはこの映畫そのものゝ罪ではないが辨士の態度だ。どうせ資本家に食つついてゐるシラミの事だから、希望をかけるこつちの方が間違つてゐるであらうが、例の愛國主義者兵隊が出て來る場面になると忽ちパチ／＼大向うから拍子が湧く、――と、すぐに辨士も一段聲を高く張りあげて、如何にも軍國主義戰爭讃美らしい風に聞へる、下手な說明をべら／＼やる。と、再び觀客が熱狂する。すべてがどうも觀客本位で辨士としての自己の毅然たる思想も確信もないには殆んど閉口した。あんな輩辨士なんか居ない活動寫眞を何處かで一つゆつくりみたいな」そんなことも沁々思つた。

が、まだフランスを見てゐない僕にとつては、芝居の背景にいつも出て來る綺麗な珍らしい天地自然と、女の肉體の美しいには、これはなにも、この映畫にのみ限つたことではないが、全くたまらない氣持ちがした。日本人の醜さおつちよこちよいさ、こんど產れたら、フランス人でもいゝドイツ人でもロシヤ人でもいゝ、とにかく日本人にだけは二度と產れて來まいと思つた。

――たつたそれだけ。そんな餘分な事をしか考へさせない、默示錄の四騎士であつたと言つて置く。（淳三）

世界欄

罪の償ひ

罪の子にも悔ひ改める時がきた！

徒に同胞を殺戮し、沃土を荒廢せしめて列强の帝國主義に迎合した、資本家以上に呪ふべきウランゲル軍の末路も亦セミヨノフの其の如く慘亦慘である。彼等はコンスタンチンノープルの歐羅巴側にあるペラの市に落ちのびた。惡運强き將軍や豪傑連は、日夜旗亭に入り浸り美女に侍かれてゐる。(其の金はどこから？) ここに慘を止むるは兵士連中だ。身にボロ〳〵の服を着け困憊そのものの態で市中を徘徊する狀は如何に罪の報ひとは云へ轉たた涙を催せしめるとぞ。けれども罪の子にも悔ひ改める期がきた！ 昨年五月セレブロウスキイ氏はバクー油由に勞働者を募集するためにペラの市にやつてきた。即ちウランゲル兵士の中から歸國を欲してゐるもの丈けを連れ戻さうとした。(バクーでは食糧品や種々な裝置に大不足を來したために今まで働いてゐたペルシヤやアルメニアの勞働者達は多く歸國してしまつた。色々な緩和策を試みたが直ぐに間に合ひ相もない。そこで氏はペラ行を決心したのだ) 氏に加何にして兵士達を連れ戻したが、氏自身の言に聞いてみる。氏は一日フランス將校とウランゲル軍の營所を訪れてみた。

『予の期待に反して、營所では將校達の口汚たない罵詈雜言しかなかつた。市(ペラ)に近接してゐる營所に於て予はバクー油田行の勞働者を二三百人募集することに成功した。予は包み隱さずに食糧狀態の窮境や仕事其のものの困難さを告げた。併し人々は嬉んで一切の艱難を受けることに同意し其代り彼等が嘗つて自分の國に背いて犯した意識的或は無意識的な罪惡は棒引にして呉れと云つた。……』

『將校連は不滿であつた。そして露西亞に歸ると云ふとの招待から洩れてゐるだけでブツ〳〵云ひ出した。しかし彼等は個人的に徐に向つて將校の歸國に對するソヴイエツト政府の態度や母國に背いた戰爭に闘要した廉で罰されやしまいかと尋ねた。予は彼等に、勞働者のみを募集せよとの命令しかもたんと告げた。……』

『予の到着後間もなく一會合が開かれた……』將校連は大いに毒舌を振ふものがあつたが、兵士は最早歸心矢の如くであつた。『多數のものが直ちに扉を排して港の方へ驅けて行つた』兎に角準備も整へて愈々出發となつた『一つの汽船はもう一杯で乘り切れなかつたで約三千二百人のものが他の汽船に乘つた。……』『間もなく錨は上げられた。……管絃樂(オークストラ)はインタナシヨナルを奏した。そして汽船がボスフオラス海に入つた時赤旗が揭げられた吾々はアメリカや英吉利や伊太利の驅逐艦を通りすぎた。彼等は喝采を叫び帽子を振つて吾々を迎へた。遂々吾々はウランゲルのヨツト“Lucul'us„をよこぎつた。』兵士連は盛に罵言を浴せかけ色々なものを投りつけた。漸く彼等はバクーに到着した。

『如何に彼等は熱心に仕事を始めたことぞ！ 實に愉快であつた。吾が勞働者は彼等

が犯せる罪の償のために働いてゐる樣をみて内心恥じざるを得なかつた。』かくして彼等と共產黨勞働者との間は圓滿に行つた。『黨委員會は叛逆者の行爲の一切の記憶を忘れさせるために「ウランゲルの徒」てふ語を用ひることを禁じた。』『六箇月後バクーは面目を一新した。製油量は一ケ月二十四万噸に達した。現在では千七十五の油井が開掘せられ製油量は日々一万六千噸に增加した。』六ケ月の勞働後彼等前ウランゲル軍兵士は自由の身となつた。或るものは鄕里に歸つた。(嘗つては自分自身で破壞した鄕里へ)或るものは何もバクーに殘つてプロレタリアの新精神を持つて究極の理想に突進してゐる。罪の子は悔ひ政めた。そして世界に類のない聖なる仕事に身を捧げてゐる。お々罪の子よ! 汝等の悔ひ改める時は來たのだ!

支那を見習へ!

支那政府に對して特殊の使命を帶びて來た露西亞社會主義聯邦ソヴイエット共和國特別全權大使 K Paikess 氏は支那共和國外務大臣 M. M. Yen に對し一書を贈り、露西亞飢饉に對し支那國民並に支那政府の寄した救濟を感謝してゐる。先づ飢饉の狀態を述べこれの救濟に對しる露西亞政府並びに露西亞國民の超人的努力を示し。更に又ソヴィエット政府の外務委員が全世界にその救濟を愬へたことを述べて、さて曰く。『豫期されてゐた樣に全世界の勞働者はこのアピールに應じて吳れました。併し政府としては極く僅かでした。大革命當時露西亞を封鎖してゐた政府の多くは幾百万といふ露西亞人を苦しめてゐる飢饉を餌にして儲け樣としたのです。卽ち露西亞政府に種々な要求をなし或は又飢饉を口實にして露西亞の內政に干涉せんとしたのです。支那は極く少數の政府――何等不純な動機なしに罹災民に非科己的救助を提供した――の中に數へ上げらるべきです。』そして彼は支那政府や支那社會全體の眞摯な態度に歡びと滿足を經驗した事を述べ次の言を以て手紙を終へてゐる。『閣下並に閣下を通じて露西亞救濟委員會總裁委員御一同、新聞紙、且つ又支那國民に對し私の最も深甚な感謝の念を述べます。そして閣下よ、私をして左の樣な確固たる信念を述べさせることを御許し下さい。今回の事に對する支那國民の活動は露西亞國民並に露西亞政府によつて賞讃せらるるでありませう(私は政府の名によつて閣下に御手紙を差上る光榮を荷つてゐるのです)そして二大共和國たる支那並にソヴイエット露西亞間の友情の[redacted]子を益々强固ならしむるありませう。私はこの機會に於て閣下に對して深厚な敬意を拂ふものであります。』支那政府は果して『不純な動機なしに『非利己的救助』を行つたどうかは疑問だ。けれども確に『救助』を實行したのだ! 又支那には已に露西亞飢饉救濟委員會があるではないか! そして相當の成績を上げてゐるではないか! 『豫期された樣に全世界の勞働者はこのアピールに應じて吳れました』確にそうだ。けれども『應じ』ただけでは何になる。心で同情しても何になる。日本勞働者の最初の試みはもろくもつぶされた。一體これは何を意味するものだ。諸君よ、今や僕たちはもう一度叫ぶ時ではないか!『二大共和國――何と云ふ皮肉な言葉だらう。

第三回教員組合全露大會

第三回教員組合全露大會は全世界の教員に對して左の如きアピールを發表しだ。

『露西亞教員國民大會は世界の教員諸君に愬ふ。

今日南露の廣漠たる平原は宛然不毛の砂漠の如きものだ。死の魔手は幾百万の勞働者並びにその子供達を襲ふのゐる。彼等の中には幾千といふ教員並びにその家族がゐるのである。

飢饉に對する戰闘はこの不幸なる疲弊せる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國に於ては極めて困難である。ソヴィエット政府——世界唯一の勞働者政府——は超人的精神を揮つて飢饉地方の住民を救濟しつゝある。されどこの困憊せる國土の用ふるに足る手段はあまりに貧弱なるがため外國よりの助力なくんば彼等を救濟することは不可能である。

世界の勞働者よ！　吾人七十万の敎員並びに敎育勞働者の代表者は親愛なる諸君に對して焦眉の急を救はれんことを懇へるものである。

如何にして而して又自を以て救ひ得るかは諸君自身最もよく熟知せる所である。諸君の國に於て國際的に「プロレタリア露西亞を救へ！」てふ喊聲の下に一大運動を開始せよ。一切可能なる手段を講じて吾人にこの救ひを與へよ。諸君の政府の首腦者の上に、吾人を隔離せしむる戰線の上に救ひの聲をあげよ。吾が疲弊せる國家を層一層壞敗させ、層一層惱まさんとする新しき諸種の干涉計劃に對する勞働階級の鬪爭も助けよ。一弩艦の建設費の半額あらば二千万人の餓死を救ふに足る。

吾人は『文明』歐羅巴の『文明』政府が吾人を救はんためこの弩艦の半ばを放擲することを拒離すべきことは疑はない。されど吾人は又諸君世界の勞働者が吾が懇へに應じて全力を傾注して吾人を救はんとすることをも信じて疑はぬものである』云々。日本の勞働者諸君、敎員諸君よ！　以て如何となす？

勞農露國の科學界現狀

勞農露國の科學界は最近異常の發達を遂げつゝある。戰前とはとても比べものにならない。今後西歐との關係が圓滑になるに從つて全く驚くべきものになるだらう。僕たちは新天地創造の聖業に孜々として倦まない彼等の努力（しかもその努力は今までの努力と違つた眞の意味の努力だ。科學と社會とが眞の意味で合致する第一步だ）に心から打たれる。今ボクロウスキイ敎授（ルナチヤルスキイを補佐してゐる）の報告によつて科學界最近の活動を摘記してみる。——

■汽船マリギン號に觀測所を設けて魚學者ソルダトフ並びにハイドロバイオロヂスト、ステルノフの一行はノヴアヤ・ゼムリア岸やカラ海を探檢した。その結果種々新しいそして非常に興味のある生物學上の材料を蒐集した。（最近のソヴィエット展覽會に出品された。

■今年度の計劃としては、動物示的地質示的調査のためにナディ・コボ探檢、植物學研究のためスルガト・タス探檢、其から動物示的調査の爲にトルケスタン遠征等がある。

■地質協會では三年間の豫定でタイミル半島に探檢隊を派遣してゐる。

■カラブガス灣行の探檢隊はまだ硫酸曹達埋藏所の位地の發見並びにその一帶の水路狀態調査を完成してゐないし、又西伯利亞行の氣象學的探檢もまだ完成されてないが着々成功を收めてゐる。

■露西亞の文學者の一隊は一九二二年の日蝕を觀測するために印度洋並に濠洲方面に遠征せんとしてゐる。その結果アインスタインの理論に關する若干の疑問を釋くだらうと期待されてゐる。

■新しく種々な科學研究所の設立をみてゐる。大體露西亞共和國の特殊の地方の生產力並びに人種學的特異性の研究に當つてゐる。だが特に注目に値するものはペテログラードのレントゲン研究所並に美術協會附屬の心理神經學會でこれは藝術的創作の理論及び心理學を樹立せんとしてゐる。

■其他科學に關する新聞雜誌が多く刊行されて各種の研究所の成績を報告してゐる。尙今年は種々重要な科學上の大會が開催されることになつてゐる。只現在最も困つてゐるのは科學書や、材料や化學用藥品や生物學的標本集が戰後缺乏を來してゐる事である。

以上頗る簡單なものだが露西亞現在の科學

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

界大體の活動を窺ひ得ると思ふ、追つて詳細を載せやう。

其家秘藏美術品入札

永年近所の旦那衆——佛蘭西家、英吉利家、亞米利加家、伊太利家等——の怒に觸れて糧道を絕れて弱つてゐた某家では今度愈々秘露美術品を手離すことに定めた相だ。(もう入札がボツ〳〵濟んでゐるかもしれない)この美術品は大概某家の先の御主人が持つてゐられたものだつたが例の騷ぎから今の家族の手に移つたものだ。いくら珍らしい歷史的な價値のある骨董品があつてもパンの代用にならんと云ふので、思ひ切りすつかり賣り拂つて(後から又取り戻すとしても)食糧品の材料や農具等を買ひ込まうと家族會議だ一決して某家の執事(何でも外國貿易人民委員とか云ふムツかしい名の方だ)に一任した相だ。其で執事君はこれからの美術品を旦那衆方の御買上げの便宜を圖つて『ペテログラードの間』と『モスコーの間』にすつかり集めて置く相だ。今までどの位賣れたか判らないがどうです世の金持諸君! 少し出掛けて行つて買つてきたら。功德になりますよ。諸君がその目的で某家に行くのならお上だつて便宜を圖つて吳れるでせうよ。だが諸君が持つて歸つても何時まで諸君がそれらを享樂し得るか保證の限ぢやありませんがね。(尙これらの美術品は本家たる某家ばかりでなく色々な別家でも賣る相です。)本社で代理販賣でもやりますかナ。

國際的道具集の週間

—ソヴィエット露西亞は今や食糧品の飢饉のみならず道具の飢饉に陷つてゐる。露西亞の全產業的富源は永年の戰爭並に封鎖のために、只反革命軍討伐用の軍需品製造のみに費されてしまつた。就中獨逸からは少しも道具や金屬器械が輸入されない。於是國際勞働者飢饉救濟委員會ではさしあたり急場を間に合せるためにソヴィエット政府の承諾を得て五月一日——七日の一週間を國際的道具集め週間とすることにした。(其の後の消息はまだないから成功したかどうかは知らない)斧、槌、鋤、鋸、ナイフ、農具、其他凡ゆる種類の金屬器具等といつたものが集められるのだ。世界の勞働者が凡ゆる手段を講じて露西亞の勞働者及び農民に道具を與へんとしてゐる(道具こそ全人民に對し完全にして富める經濟生活を築き上げるものだ)のを見れば日本が……。

△メーデーで廿日の拘留を喰つた美青年の若松君到つて元氣なもの「別莊の飯は自宅のそれより遙かに甘い」とは又入る根膽か。

△五月十一日夜小牧の家で同人が「スパイ遊び」といふ小遊戲をやつた。メーデーに一晚亭主をとられた弘二君の新妻「種蒔く人」といふ小職業あてを「ビラ蒔き」ですかはさてもさても。

△貧乏人の洋文突然弟君を失つてさて歸るに金子がない。

地方欄

足尾のメーデー

暴王古河の新規定が時もあらうに勞働者に取つてたつた一日しかないメーデーその日から實施されるといふので、當日三山に何ものかの動揺があるだらうとは、僕らが上野を發する時の豫瞽であつたが、聞ぐに相異して足尾の第一回メーデーは無難であつた。その意味は足尾の人たちは案外穩健であつたといふのではない。あの猛者連の勢に官憲は撤頭撤尾壓倒されたのだ。心置きなく去勢されて仕舞つたのだ。行列中常に僕らをつきまとう人間の假面をかぶつた忠犬(資本閥にとつての)がうようよしてゐたが、若い連中は承知せず「こいつは犬だ、皆しつかり覺えて置け」などと眞向にやつけるあたりは、都では見られぬ有樣であつた。示威運動が不許可であつたそうだが、幹部の奇計で見事事實上の示威運動にして仕舞つた。メーデーを止めてくれと言へば○○歌を高唱するし、○○歌だけを止めてくれと言ふとメーデー歌を高唱するといつた風な有樣であつた。

夕景から城崎座で猛烈な講演會があつてそれが約五時間もつゞいた。辯士は東京から出掛けた全國坑夫總同盟の理事坂口君を始め、建設社聯盟、文化會種蒔き社それに秋田勞農社まで入れて九名の他に、本山や通洞の辯士併せて二十名以上、各自熱辯を振つた。三回許りの中止があつたが、解散にならなかつた。これは賢明な足尾署長がメーデーの意義をよく理解された結果であることを何人も認めないわけには行かぬ。僕らは資本家は結局地獄に行くことを常に信じてゐる。と同時に、それが忠實なる番兵であるところの警察官憲も地獄に墜ちるだらうと堅く信じて來たが、少くも足尾の官憲はあの日一日の功績で帳消にならないものでもないと思つて歸つた。そうなれば彼等のために幸福である。古河は豫め當日の組合側氣勢を怖れ俄かに御用組合員を狩り集め一大反動運動を起すことを目的とする運動會を催したさうだが、腰拔けでない限り誰れが行くものか。城崎座は約二千の聽衆で熱狂した。

當夜本部で懇親會があつた。坑夫君と僕たちの間に打解けた懇談があつた。悲壯の叫びと萬丈の氣焔がともにともに一同の胸の中なかをある波動をなして通つた。血は一つである。その夜、僕は殆んど雨と思はれるやうな川の流を聞きながら、いろいろなことが考へられて寢就からなかつた。僕ら、少くも僕自身は、ああいふ悲壯な運命の人たちの前でものを言ふ資格があるか。僕の眼には未だ三十を越した許りの人がヨロケといふ怖ろしい病のために老年になり果て、餘生を虐殺者の氣扮に委せねばならぬ人たちの悲慘な姿が浮べられてならない。古河に限らず資本家といふ吸血鬼が存在する間、その悲壯が永久につゞくであらう。

翌朝、製錬場を見た。その時、僕の傍に前日通洞で認めた最も決心に滿ちた青年がゐた。その青年勞働者が言つた「昨年の爭議でここを占領してあつたら」……それが、僕に話をかけるやうな、また、自分自身にひとり語を言つてゐるやうにも思はれた。僕らの眼の前の香山の正面が墓地であつた。何人がそ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こに眠つてゐるのだらう。それは言ふまでもない。わかり切つてゐる……と、ふと眼をそむけると「俺たちは眠つてゐるのではない、待つてゐるのだ」と、締め切れぬとこしへの怒を唱へながら渡良瀬川が私の足下を流れてゐた」●（羅手九）

異端座主催「種蒔く人」同人文藝講演會を觀て

友人のMと道頓堀を散歩した或る春の夕べ、すれ違つた美しい婦人の手から一枚のビラが手渡された。其れには「文壇の舊き資本閥は其影漸く淡く……彼等は必然亡ぶべくして亡んで行くのです……私達の講演會は來るべきものと叫びであると共に去り行くものに對する挽歌を唄はんとするものであります……」と書かれた異端座文藝講演會のビラだつた。

私は此れを見た時、其の主催者を愛する異端座であり、而かも講師が東京「種蒔く人」同人であると云ふ事に依つて、私の心は譯もなく引付けられてし舞つた。

以下私の觀た異端座文藝講演會の狀況を書いてみよう。

四月二十一日の當夜、私が會場である天王寺公會堂へ出掛けたのは七時前、未だ聽衆の數の餘り多からざる時だつた。それよりも私の先づ驚いたのは正服私服のお役人の餘りに多い事だつた。近時此種講演會に對して、其筋は非常な神經過敏であると云ふ事は聞いて居たが、眼前此の事實を見て、私は全く嫌やな氣分に襲はれた。此事に對しては玆で餘り多くを云ふまい。

やがて定刻司會者の挨拶があつた其の内「實は大阪と神戶の兩所に於て今夜同時に此の講演會を開く事になつたのです」とあつた。私は事情の如何は知らないが、兎に角、限られた時間に、四人の講師で大阪と神戶の馳け持ちは至難だらう、講師の疲勞よりも時間の上に或は齟齬を來たす樣な事はあるまいか、との懸念を抱いた。

果して「世界主義の良心」と云ふ村松正俊氏の講演が濟み、佐々木孝丸氏の「世界主義とエスペランド」の講演が終つたが、次の講師の顏が見えなかつた。

やがて司會者より「神戶から次の講師が未だ來ないので、講演會閉會後に限り許された戲曲朗讀を特に其筋の了解を得て此の間に挾みます」との事だつた。

期待した金子洋文氏作「洗濯屋と詩人」の戲曲朗讀が若い力に漲りた異端座同人に依りて演ぜられた。それは寧ろ素演と云ふべき出來榮で、金持と貧乏人との鬪爭を痛快に書かれた此の戲曲は實際小氣味よく見られた。

朗讀も終つたが未だ講師が來ぬらしい、私は司會者とお役人との討話を聞くともなしに聞いた。

「講師の來る迄誰かに喋らして下さらないでせうか」

「いけない、本部から四名の講演者以外には絕對に喋る事を止められて居る」

「では音樂ならいゝでせう」

「それも樂譜を檢閱してから」

やがて輕快な旋律は一種重苦しい氣分の漲つた會場の隅々に迄流れた。曲も終つた。未だ。講師が名えぬ。此時思ひがけなくも美しい容姿が壇上に現はれた。聽衆の奇異の眼は一齋に向けられた。司會者が其れは新社會社佐藤藤太氏の令孃愛子孃であり、此の有樣に同情して自ら進んで獨唱ずべく起たれた、と告げた時、急霰の樣な拍手が起つた。美しい歌の唄はれてゐる時漸く講師が着場した。

やがて「唯物史觀より見たる文藝」と云ふ平林初之輔氏の講演があり、最後に金子洋文氏の「空想社會に於ける男女關係」の講演が終つたのは十一時前だつた。

私は閉會後主催側の友人に就いて聞いて見た。そして此度の講演會が豫期の結果を擧げ得なかつた理由として、左の四項を私は擧げ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。

一、當局との折衝に意外の時日を費し、漸く開日一日前に至りて總ての了解を得たと云ふ事

一、從て廣告其他の運動が豫定の如く運ばなかつたと云ふ事

一、偶然大阪と神戸の開會日が一致した爲め講師の疲勞時間に齟齬を來たした事

一、而かも種々の制限を附せられた爲め臨機の處置を採り得なかつた事

以上の原因を知つて、其の結果を見た時、私は此度の講演會が決して失敗しなかつた事を信じるものである。聽衆が豫期の多數で無かつたにせよ、其の何れもが終始熱心に傾聽したと云ふ事實は、此の講演會が決して無意義でなかつた事を裏書するものであるまいか。

種蒔く人は立派に新の種子を蒔いて歸つた事を信じる。完全に蒔かれた一つの種子は、やがて根を張り幹を延ばし無數の種子を蒔く事を私は疑はない。

異端座文藝講演會事實の報道は以上で盡きて居る。

最後に「種蒔く人」同人及び異端座同人の健康を祈ると共に、他日再び當地に於て此の健闘を私は望む。

鉈をとぐ

大阪　川口生

百姓が
鉈をといでる
鉈を、ぎらぎら
白晝に
なにごとが
あるのか、俺も
鉈を、ぎらぎら
うちへ歸つてとぎませう。

館林より

長脇差

××兄——

「種蒔く人」四、五月號ありがたう存じました。いまゝで、この雜誌の名だけ聞いてて、實物を見る機會のなかつた私に取つては、大きい一つの驚異でした。なんと言ふ緊張しきつた編輯振りでせう。またなんと云ふ痛烈な絶叫でせう。僕も長脇差の血を受けて居ます。骨が鳴らずに居られる譯がありません。貴誌のつゞく限り、愛讀したいと思ひます。

序ですが、これは昨夜一人の友から聞いた話ですから、事實かどうか、まだ解りませんが、こちらでは、この雜誌の「赤色帶」が、その筋に恐れられてゐるそうです。一寸聞いても痛快です。が、その赤色帶の恐怖から出る、彼等の眼がうるさいです。出來ることなら、うまく包裝をやつて御送り下さいませんでせうか。こんなことを言へば、妙におぢけづいて、および腰をしながら御願ひするやうに御思ひになるかも知りませんが、なるたけ安全に、うまく雜誌を手に入れたいの杞憂からです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聾人

△新苗賣節　（賣文社）

今朝、新賣文社の裏を苗賣が唄を流して通りました。苗床の用意は出來たか、時季を遲れな、さあ植えつけろ——民衆の新秩序の苗を……と吾々に迫るものゝやうに。

レニンの苗やトロツキーの苗
日本の政府は賣らさ苗
それでも生へてしかた苗
『陰謀事件』は片づか苗
『過激法案』進ま苗
來年どうだか分ら苗
ゼノア會議も役立た苗
世間は不景氣でしやう苗
內閣改造屁になら苗
旣に天下は治まら苗
已れぢや夜も日も寢られ苗

首がころがる

大阪にて、中西伊之助

○
英國旗の上に、紅提灯の上に、
ひいら、ひいらと
　櫻の花が散る。
なんと云ふ美しい情景だらう。
之れをぢつと見つめる俺の心。
○
勞働組合の「宣言」ビラを撒いたと云ふて、
　仲間が首を馘られた。
演說をしたと云ふて、
　またその次に首を馘られた。
ころりころりと、造作もなく首がころがる。
寄り集つた二十幾つのさびしい顏！
○
一日でもいゝ。三十分でもいゝ、
あの變な旗の下で、紅提灯の下で、
櫻散る下で、
うつとりした心もちになつてみたい。……

レーニン、トロツキの種子

雜草園

拜啓　貴社益々御隆昌奉大賀候陳者小方天竺牡丹、姫百合、浦島草の種を蒔き度と存居候間、至急右草花の種子價格御通知相願度尙御面倒ながら、種蒔係出張員御派遣願度と存居候、

二伸其他トロツキイ、レーニン、エスペラント等西洋花類の種子有之候はゞ其價格お序に御一報願上候、先は右乍御面倒御依願迄如此御座候。匆々。

酒場

芝涙花

外には雨が降つてゐる、
泣いてゐる樣にふつてゐる、
ここは夜ふけの酒場だ、
おい姉さん、
もう一杯ついでくれ。
そんないやな顏をせす、
ニツコリ笑つてついでくれ、
伴天着だつて人間だ、
血もありあ戀もするだらう。
あばゝ、
おまへのむつちりした白い手に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おとゝ、
酒がこぼれる、もつたいねへ、
この一滴だつておい姉さん、
己の親父は百姓だ、
朝から晩までかせぐんだ、
汗水たらしてかせぐんだ。
こぼしちあいけねへ、
わかつたかい。
おい姉さんもう一杯ついでくれ、
今日一日の勞働で、
己が握つたこの金は、
少ないけれど光つてらあ、
ニツコリ笑つてついでくれ。
チツプをたんまりくれてやる。
おい姉さん、
己も笑つてのみたいんだ、
涙と一つしよにのみこむんだ、
己が不平を云つたとて、
なんであいつにわかるものか
飲でみはゝわすれちやえ、
卓をたたいて拳をにぎり、
床をけつてもはじまらね、
煙草の殼よりつまらねへ、
己の不平はすてゝしまへ。
おい、おい姉
もう一杯ついでくれ、
ニツコリ笑つてついでくれ、
のんで唄へば夜もあけよう、
あしたは天氣になるだらう。
泣いて笑つて酒をのみ、
のんで唄つて死じまへ、
それでもあいつは知らん顔。
さあもう一杯ついでくれ
ニツコリ笑つてついでくれ。
おまへも己等の友達だ、
いつしよに一杯やらねえか、
あしたはちんばの職工も、
肩のゆかんだボロ服も、
一つしよに連れてやつてくる、
そしたらおまへもニツコリと、
笑つて皆を迎へてくれ。
あはゝそして皆で笑ふのだ。
〇〇〇の馬鹿と笑ふんだ。

大木會の邊より

硬　骨　生

私の敬愛する種蒔き社同人諸兄よ。

私は第二號より貴誌の雄々しき奮戰振りにこの五體の赤血を沸してゐる地方の一都會に住む貧弱な一青年です。

私より種蒔く人を取るのは實に私よりパンを奪ふに等しい。種蒔く人は私の生命であり私の生命は種蒔く人である。

此の意味に於て私は貴誌の發展と同人諸兄の御奮闘を祈つて止まないものです。——

今私は當地の所謂其の筋より多少怪疑の眼を向けられてゐる者です。その理由はお話にならないつまらないことです。僕が去る辯論會の席上に於て神戸の勞働爭議批判を試み偶々彼の非常識な警官一派の盲動を痛撃したことに始りました。

これから無理解な其筋の壓迫は漸く僕の身上に迫つて今や僕の貧弱な現在の地位をも威嚇せんとしてゐます。

かうした官憲の横暴は獨り當地許りではありますまい。秋田の事件と云ひ、貴社の講演會の時と云ひ一として然らざるはなき有樣ではないか。

嗚呼醒めよ青年よ、立てよ勞働者よ——

無智な彼等は一片の法令や或るひは權力の行使に依り社會總べての問題の解決を夢見つゝあるのだ。

然し乍ら僕等は常に當局の無茶の壓迫や可酷な取締りによつて民衆の思想が一歩一歩と喜ぶべき方面へ踏み出されつゝあることだ。

彼等の有するものは權力であり僕等には多數あり團結があるのだ。我等はパンの爲否眞理の爲に飽く迄も戰はなければならない。（一九二二・四・一九）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

メーデーの歌

藤田浪人

パンを造るも勞働者、
衣を織るのも勞働者、
汽車や汽船や自動車を、
運轉するのも勞働者。

瓦斯よ電氣よ石炭よ、
晝を欺く不夜城も、
吾等が一日休む時、
世界は忽ち暗となる。

今日は五月の一日よ、
起てよ世界の勞働者、
吾等は世界の主人公、
世界は吾等の物なるぞ。

芽生

鈴　二

九州地方を旅行してみて諸君の蒔れた種がかくまで雄々しく芽生えてゐるのをみて一人ほゝえまずにはゐられなかつた。

放浪者の幻想

飯田德太郎

人は何か
◎
愛さずには生きられぬ。が、
お前は俺に言ふのかへ
「大自然にでも親しめ」と?
然しね聞いてくれ
今日で二十日!!
俺の寢床は草と土だつた。
雨が時々浸みてくる
話相手はあの大げさな
椎の木からくる風だけよ
どうだね!
ずい分自然に親しんだらう?
そしてね、
毎日毎晩見た夢が
そりや振つたものだつた。
◎
トルストイもゲーテも近松も、
何處か偉かつたに違ひない?
灰色の顔に同じ灰色の空虚を抱いて、
夫と妻が生きてゐる
何の爲に生きてるかは無理に知らん風で
時々
笑つて見たり
泣いて見たり
抱き合つたり
反目したり
信じたり
疑つたり
又、錢勘定をして見たり
そして
溜息ついては
干乾びた子供の姿を
見つめて見たり
いつの間にか死んで行つたり、
同じ種類の人間でしたが!
◎
動物諸君!
人間を餘り買ひ被るな
俺は腹が減つてゐる
そして神聖な?……とでも云ひたい女が欲しいんだ。
おまけに感窮まると
鐵砲擔いで死に行く
一人のお人形さんを守つてね
◎
人の言葉を信じやう、
殊にあの人の言つた事は、
「困つた人を救ふ爲、
こんな仕事をするんだが、
お前も失職してるさうだ、
だから、俺の所へやつて來い」
世の中に、さても義人の多い事
かたつぱしから「人の爲め」で一杯だ。
◎
日本人に大和魂はないと、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さる負傷兵の話！
「日本人は膽つ玉が小せいんだ。
大砲の音を聞くと、

赤い町

新まゝ書

先日の事だ、神戸に（紅い町）と云ふのが産出されたので有る。すると神戸の警察官は一速くも家宅そうさくだ。又家宅そうさくをはられるやうなへまな事をして居つたのだ。先づ紅い町の創刊號が市の書店に顏を出すと共に紅い町の同人は皆一人餘さずケン束だ。

而しそれは紅い町のやり方がまずいと想ふ。まず云はしたなれば石の上に種を蒔いのだ。だから萠の出ると共に枯れてしまつたのだ。

私しも此れから土を深く堀つて種を蒔こう想ふ。

異大な力

ＭＹ生

きにやうもおとゝいも樂しく歌ひ通した
百雀が
今朝く早くからチイチク〳〵と
樂し相に歌つて居る
永らく虐たげられた
俺達にも
どうやら樂しく歌ふ時が近づいた樣だ。
俺達は兄弟の爲め犧牲になつても其をむかへる。
その時初て
喜びにみちて樂しいと云ふ
人生を味ふ事が出來る
オヽ待遠き！
異大な力の所有者！
〇〇！ 早く來れ

花見

鈴俊道

おゝ、無智無力なる兄弟！
お前たちの顏を彩る香のたかいおしろいが、
あくことを知らない貪慾と、狡猾なる魔睡劑に醉はされて、
假裝行列の女工の群よ！
胃袋の中の熱した酒が
幾人の兄弟を食ひ物にしたか。
嬉しそうに振る旗持つ手、
樂しそうに歌ふその口。
分らない？
おゝ、兄弟！
最後の血と肉を絞り易からしめん手段であることが！
恣いまゝに振まふ强盜詐欺殺人の權力。
不義のありつたけを見せつけられて
むづ〳〵と湧き起る青春の熱血の迸流
さへぎる凡てを滅裂の谷底に葬つて
突進せよ！
近づいた曉の明るみに！

別なことですが御令弟樣（熱風君）の御出産を祝す、

おゝ△△、〇〇

袴田生

四月號雜有落手どの頁にもどの頁にも熱と力が溢れて居り鮮血がにじんで居る。いつも種蒔く人を讀む度に自分の臆病。意氣地無さを叱責され批難される氣がするそれほど僕は種蒔く人に指導され鞭撻される所が多いのです。

モ少し强く生きねばならない。
[illegible]
おゝ△△！ 〇〇！ 新らしい生活。新らしい文化の生まれるのもそれからです。

車掌さん

鈴俊道

器械のように
お客が乗つてしまふと「はい動きます」ちんちん
車掌臺につゝたつてゐる車掌さん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「もうお降の方はありませんか、はいお待ち遠さま」
其の時
今朝袴が破れてゐると泣き乍ら
學校へ出て行つた車掌さん。子供と同年位の四五人位の洋服を著た小學校の生徒が乘つた。動き出した電車の中で騷ぎまはるこの生徒等と、
其の前に腰かけて面白そうにそれを眺めてゐるお伴を連れたどこかの奥さんと
車掌臺につゝたつてゐる車掌さんと
おゝ何んと言ふ恐しいコントラストではないか
車掌さんはだまつてつゝ立つてゐる。
車掌さんの目がうるんで來た
憤怒！
車掌さんの子供たちはなぜ
あの生徒たちのようにきれいで快活でないのだらう
車掌さんのお内儀さんはなぜ
あの奥さんのようになまめかしくないのだらう
とう／＼ため息をついた車掌さんが………
氣味惡いほど微動だもせぬその目だまは
眞赤な焔に化した！
何物をもやきつくすに充分な焔に
それは絶望の焔だ
それは憤怒の焔だ
それは偉大なる希望の焔だ。
おゝ何んと言ふ恐しーコントラストではないか。

立憲國の恩典

神戸　K　O　生

黎明の空は、紫色のフイルムを見て居るが如く、美しい裡に明て行く。寒い風は頬を刺し指先足先はちぎれる樣に、寒氣が骨髓まで透徹する。俺達の仲間は、青服黄服に身を包み、片手に辨當を提げ、護謨靴で泥濘を蹂躪りつゝ、虐げられに行くべく、毎日同じ事を、繰り返して居るのだ。又虐げられなければ、生きて行かれない世の中なのだ。朝は晩の光りの瞬きを、戴きて起き、夜は町々の華かな電燈の輝きに照されつゝ、餓へたる腹を抱へて、小さな電車の隅に慘じめな姿を場末の貧民窟へ運んで行くのだ。之れが俺達のプロレタリアトの毎日の生活だ。之れが文明國とか立憲國とかの民衆への恩典だから面白いのだ。併し俺達は之れで滿足するやうな意氣地なしではないのだ。飽迄も闘つて見せるのだ。

勞働者の墓はない

新島榮治

野方の丘に、
城廓の樣な大きな墓地を、
三井で造る、
幾千幾万の勞働者が、
賃銀を貰つて墓地を造る、
生活の爲めに、
子供の學費病人の藥餌、
それからそれと樣々な形に變つて行く、
勞働の神精か悲慘か、
與ふる者の幸か、
勞働を金にする程の不合理か、
何故に勞働者は他人の墓を造る、
何んの爲めに、
パンの爲めに藥餌の爲めに、
誰れの墓を、
三井の墓を富豪の墓を、
勞働者よお前の墓は何處にある、
お前の墓は、
勞働者よ、お前は他人の墓掘りか、
おゝ勞働者よ、

一、九二二、四、九、

社會主義講座（二）

空想的社會主義と科學的社會主義（承前）

今、空想的社會主義を述べるからと言つて、決して社會主義を一個の理想郷(ユートピア)と解してゐるのではない。社會主義は常に一つである。只社會主義を實現する方法が異つてくるのである。では理想郷(ユートピア)とは何か？ これは希臘語のウートポスから來た言葉で、「何處にも無い」といふ意味である。想像でもして見なければ實際には存在してゐない物である。理想郷時代の社會主義は、その論據に於て方法に於て、殊に當時の經濟的狀態に於て、實現の出來ないものであつた。只頭の中だけで實現出來るのであつた。それは總て大きな運動に付き物の、廣い天才的な先驅であつたのである。

では空想的社會主義の主要な特徴は何であるか。先づそれは一の型に纒つた社會しか見ない。社會を階級にも種類にも分たず人類或は社會全體を問題にする。これに反し近世社會主義は、マルクス、エンゲルスが一八四七年に起草した共産黨宣言の第一句、「總て從來の歴史は階級鬪爭の歴史である」といふこの一大眞理の認識に歩を發してゐるのである。

階級の存在は社會主義者が發明したものではない。歴史上の確かな事實として、たとへ社會主義でなくとも、識者の眼には映するものである。ギゾオの樣な歴史家も、階級鬪爭の理論を認めてゐる。確か一八二五年に出版された書物の中で、彼は佛蘭西王政の全歴史を即はち大革命前の全佛蘭西を、階級の存在とその鬪爭でもつて説明してゐる。またマルクスが非常に尊敬してゐた作家、近代小説の創始者バルザックも階級の存在を認めてゐる。彼は言ふ。「社會は宛も自然の如きものだ。社會は人間を作る。而も動物に於けるが如く、雜多な種類を作る。兵士、勞働者、爲政者、辯護士、政治家、閑人、商人、水夫、牧師、詩人などその差異は一寸識別し難いけれど、その實、狼、獅子、驢馬、鳥、鮫、牝山羊などの差異と同じである。從つて社會的な種類は動物の種類と等しく、存在したものであり、また何時の時代にも存在するものである。」

これで見るとバルザックは社會主義者より遙か進んでゐる。社會主義は階級差別を永劫不變なものとは見ない。單に社會的歴史的狀態の所産だと思つてゐる。だから、それ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を生じた社會的原因と共に消滅するものだと思つてゐる。所がバルザツクは、他の總てのブウルジョアと同じ樣に、この存在事實を永久の不變的眞理と見たのであつた。彼は社會を進化しつゝあるものと見る事が出來なかつた。がとに角、バルザツクの樣な恐るべき觀察著は、現代生活の基礎的事實である階級の存在を見免すことは出來なかつた。

この階級の混同、階級分裂の無理解から、空想的社會主義の他の明瞭な特徴が生れてくる。即はち空想的主會主義は無差別に總ての善き意志に賴つてゐた。好んで彼等は爲政者、權門、支配階級に賴つた。彼等は總ての政府に向つて言つた。「私有財産に基づく經濟的不平等社會的不平等は、總ての惡の根源である。貴君等はこの不正悲慘の根源を廢し、社會を改良することに、道德的、社會的、政治的見地から興味を持たれるでせう。」

全く立憲主義者であつたサン・シモンもこの通りであつた。彼はナポレオンが自分の社會改革案の唯一の採用者だとなして、瑞西のジュネエヴから手紙を——あの有名な手紙をナポレオンに送つたが、讀まれた事はもとより、封を切られたことも無かつた相である。

ロバアト・オウエンはアアヘンに會合した君主達即ち神聖同盟の創設者に賴つた。然し神聖同盟の目的は佛蘭西大革命の政治的自由の精神を撲滅するにあつた。そこで、わが偉大なる夢想家にして英國ユオペレイションの創設者であるロバアト・オウエンが、如何にその社會改革案の採用を力說しても、顧みられないのは當然であつた。彼等君主はオウエンを狂人扱ひにしてしまつた。

シャルル・フーリエも亦天才的な空想家であつたが、彼は、誰か博愛家の金持がやつて來て、自分の理想になる共産村を實現するための資金を與へて與れるのを、貧しい、自宅の一室で、毎日一定の時刻に、前後二十年間も待つてゐた。

空想的社會主義者は進化論者であつて、反革命主義者であつた。十八世紀末の革命の大なる苦惱の後に出た之等の人々は、革命の失敗から論證を引き出して、國民にまた總ての有識者に說いて廻つた。彼等は言ふ。「政治的改革が駄目な事は解つたであらう。社會から不正と悲慘を除くには、社會の經濟的基礎を改革せよ。そのためには吾等の原理を、吾等の改革理想を受け容れて、革命を行はなくても好い樣にせよ。」かくて空想的社會主義者は決定的に反革命主義者であつたのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

空想的社會主義の第四の時徴は國家的な限界のある事である。敢て國家主義とは言はぬ。それには餘りに純であつた。只その時代に於て彼等は萬國合同の觀念を持つことが出來なかつたのである。フーソェは萬國合同の豫感をもつてゐたが、豫感に止つてゐて明確な形を取つてゐなかつた。また當時では一黨の組織も同樣に問題となり得なかつた。當時は資本家社會が漸く出來かかつた許りで、無産階級もまだ小供時代であつた。從つて勞働者階級とか自覺し組織だつた無産階級などとかは人の口に上ることがなかつた。その上空想的社會主義者の手段とする所は、個人主義者の手段であつた。誰も彼も新制度の發明者を以て自ら任じてゐた。これに反し現代の社會主義は何等發明する所なきを誇り、存在事實の上に立脚するを誇りとする。

現代の社會主義が空想的社會主義と異る點は、一人の天才の畫策に基いてゐるのでもなく、個人又は數人の意志の上に立つてゐるのでもない事である。現代の社會主義の理想とする所は、社會的政治的經濟的道德的の諸勢力の歷史的進化に於ける歸着點である。即はちこの諸勢力は過去數世紀を動いて來、現在或る方向に動いてをり、遂に自ら發展しつゝ共產制度實現に終るものである。これは既にサン・シモンにあつて輪廓を示してゐる。サン・シモンは、社會改良の理想は過去の研究に立脚し、未來は過去の勢力の結果でなければならないと言つてゐる。サン・シモンはかくて現代社會主義の第一步を踏み出したと言ひ得られる。

現代の社會主義者は、社會主義が優秀なもの、善きもの、正しきものであるが故に、實現されるとは言はない。恐らくれは社會主義の實現されない理由であらう。現在の狀態にあつては、社會主義は餘りに善く、餘りに正しい。かくて現代の社會主義者は言ふ、「吾々は現在の社會にあつて、一定の條件を技術的條件及び人間的條件を明白にしてゐるのだ。」

現代の勞働は、個人的に知つてゐる一定の顧客を相手にした、中世の職人の勞働とは異つてゐる。近世の産業は、お互に仕事の何處を受け持つてゐるか分らない分業組織の下に、世界市場を相手として働く集團的產業である。而も此の大きな集團的生產の事實に面する時、吾人は其處に一個の矛盾を見る。即はち勞働は集合的なのに拘らず、利潤は依然として個人的なものであるといふことである。現代社會のこの根本的な矛盾――集合的勞働と個人的搾取り――は、集團的勞働者と個人的搾取者即はち無產者と資本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家との間に、日毎に烈しい避ける事の出來ない鬪爭を釀してゐる。この避け難い衝突の結果は　共產的社會主義社會の實現に對する鬪爭となるのである。

更に、社會主義が他の諸學說と異る根本的な差異は、單なる抽象的觀念の中にあるのでなく　生活事實その物の中にあることである。社會主義は社會の階級的差別を考慮して、決して搾取者の善き意志に賴らない。丁度キリスト敎普及時代に、ローマ皇帝の中に私かな信者があつた樣に、社會主義も支配階級の中に多少の同情者又は同志を持つ事はある。然し一階級が悉く自己の特權をすて、喜んで見切りをつけた事實は、歷史上に見た事がない。社會主義がどんな人の善意にも理性にも、常識にも賴らないのは、かうした理由からである。從つて社會主義は社會の變革に依つて利益する無產階級を友とする。共產黨宣言の末句に於て、マルクス、エンゲルスが言つた「[illegible]である所の、無產階級を友とするのである。

社會主義はそれ故に一定の階級に賴る。然し「階級の社會主義」といふことは、一旦社會主義が實現された後に於ても、尙然りといふのではない。反對に、社會の階級分裂から生じた現代の社會主義は、階級消滅に至るものでなければならない。何となれば、原因がなくなれば、必然的に結果もなくなるわけである。

無產階級の階級鬪爭は、かくて必然的に自己階級の解放に至る許りでなく、全社會の解放をも導くのである。この點からして、獨逸勞働組合の創設者が、勞働階級の歷史的使命を說いたその有名な演說に於て言つた深い言葉が生れる──

「一人一人を取つて見れば、勞働者は資本家に比べてより善くはない、時としては惡いこともある。然し階級として考へて見ると、勞働者階級の資本家階級に對する强味は、その階級利益、その利己主義である。資本家階級は社會維持の反動的觀念に囚はれてゐるが、勞働者階級の利己主義は全階級の解放と結びついてゐる。勞働者階級は全社會を解放することに依つてのみ自己を解放し得るのである。」

さて結論として次の事を言はう。現代吾々は社會主義者と自稱する、空想的社會主義へ後戻りしてゐる者を見受ける。自分は彼等を改良主義者と名づけた。若し諸君が空想的社會主義者の特徵をよく了解したら、改良主義者が同樣の明確な特徵を持つてゐることを知るであらう。自稱「社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會主義者」即はち改良主義者の立脚點は階級の協調即はち階級の混同である。彼等も亦政府の善意に、善良な大臣に頼り、自ら政府に加入を要求してゐる。彼等はまた、支配階級の名に依つて政權を握つてゐる者即はち搾取者に賴る。彼等が「革命を欲しないなら改良せよ。」といふのも空想的社會主義者と同樣である。が欲し樣と欲しまいと・支配階級はその政策でもつて革命を喚起するであらう。昔の空想家は經驗も淺かつたし、無產階級も今日の如き確然たる存在を示してゐなかつたから、少くとも言譯の言葉はあつた。現實の空想家はこの言譯さへも持たないのだ。彼等は何よりも國家的領土を考へる。彼等は國家社會主義者だ。萬國合同なんて口だけの體裁に過ぎない。從つて彼等は昔の空想的社會主義者のあらゆる特徵を備へてゐる。組織をもたないといふ、第五卷目のまで持つてゐる。

ほんとうの社會主義は只一つしかない。この事を學說及び事實の上から探究して、諸君に證明しようとするのがこの講義の目的である。而して只一つの社會主義と言ふのは、[redacted]

前號正誤

頁	行	誤	正
四四一	八	interventionism	inte.uen:ionism
同	一八	bi:	faile
同	一九	J.sser	passer
四四二	一	laissefa:re	laisser faire
同	同	rons	nous
同	一五	立派	立法

場合，冠詞を全く書くも可なり。 さは
*ザメンホフ博士の言なり。
　*エスペラントの創始者。

§6) **目的格** (…を) は語尾に n を附す。

例 {homo　人…………主格 / homon　人を………目的格} 單數
{homoj　人々………主格 / homojn　人々を……目的格} 複數

目的格の名詞を形容する形容詞にも又 -n を附す。

例 {bela birdo　綺麗な鳥……主格 / belan birdon　綺麗な鳥を.目的格} 單數
{belaj birdoj　綺麗な鳥…主格 / belajn birdojn　綺麗な鳥を…目的格} 複數

〔比較〕{mi estas homo　私は人間である。 / mi vidas homon　私は人間を見る。}

【練習】 次ぎの單語を諳記せよ。

al　…に，の方へ
alportu=alporti　の
(命令法)持つて來い
amas　愛する(現在)
ankoraŭ　まだ，猶ほ，
arto　藝術　L更に
avino　祖母
belsona　調子頁き
bela　美しき
blonda　ブロンドの，
金褐色の
besto　動物，獸
bruna　褐色の，茶色
ĉerizo　櫻實　Lの
donas　與へる(現在)
de　……の
Danujo　デンマーク
en　…に，…於て
estas　ある(現在)
edzo　夫，良人
fratino　姉，妹
falas　落ちる(現在)
franco　佛蘭西人
filino　娘
forta　強き
granda　大きな
hieraŭ　昨日
homo　人
haro　髭
Henriko　ヘンリー
fnfano　子供
kapo　頭
knabino　女兒
kokino　雌鷄
patrino　母
Parizo　巴里
pano　パン
vitro　硝子
vivo　生，命
levis　擧げた
lando　國，土地
lingvo　言語　「した
matura　熟した，成長
muziko　音樂
malmola　堅き，固き
mano　手
reĝo　王　「した
reĝis　君臨した，支配
skribis　書いた
venis　來た
vizaĝo　顔
nobla　貴き，高尙な
onklo　叔父
pluvo　雨
prudenta　用心深い
patro　父
palaco　宮殿
somero　夏　「在)
supreniras　登る(現
tuta　全ての
urbo　都市
vaporo　水蒸氣
imperiestro　皇帝
viva　きびきびした，
生氣ある

次ぎの文章を和譯せよ。

La homa vivo.—La homo estas besto prudenta.—Bruna homo venis.—La infano levis la manon. Kapo de knabino.—La vizaĝo de la patro estas nobla.—Haroj blondaj La placo de la reĝo de Danujo.—La palacoj de reĝo Henriko.—Palaco de la reĝo.—Palacoj de reĝo.—La filinoj amas la patrinon.—Imperiestro Napoleono reĝis la tutan landon.—Parizo estas granda urbo.—La avino donis panon al kokinoj.—La edzo amas knabojn fortajn.—Alportu al la fratino ĉerizojn maturajn.—Esperanto estas belsona lingvo.—Onklo Henriko skribis hieraŭ.—La muziko estas bela arto.—Pluvo falas ankoraŭ.—La pluvo falas, la vaporo supreniras.—La franco estas viva.—En somero en la somero).—Vitro (la vitro) estas malmola.

エスペラント講座に就いて

この講座は、出來るだけ簡單に平易にエスペラント全般の概活的講述をするのが目的で、進んで高等的な研究に入る前の人への手引であります。そして約半年を以て完結する豫定です。隨つて講義は非常に急速ですから、分らないところはどしどし質問を寄せて下さい。(必ず返信料附で)——係。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ĥoro クホーロー　　fojo フォーィヨー
juna ィユーナー　　balo バーロー
valo ヴァーロー　　hejmo* ヘーィモー
feino フェイーノー　　aŭdi* アーゥディー
Eŭropo* エゥローポー
Japanujo* ィヤパヌーィヨー

*) j. u. は子音なるが故に揚音を符せず。

C. 比較發音

{saluti サルᵒーティー / salti サールᵒティー}
{jes イェース / ies イーェス}
{si スィー / ŝi シー}
{bela ベーラᵒー / vera ヴェーラー}
{faro ファーロー / haro ハーロー}
{ŝtelo シュテーロᵒー / stelo ステーロᵒー}
{paŝi パーシー / pasi パースィー}
{cento ツェーントー / ĉento チェーントー}
{serĉi スェールチィー / ŝerci シェールツィー}
{cia ツィーアー / ĉia チーアー}
{ĝibo ヂーボー / ĵibo ジーボー}
{ĝardeno ヂャルデーノー / ĵaluza ジャルᵒーザー}
{aĝo アーヂョー / aĵo アージョー}

第二課 Leciono Dua

§1) **品詞語尾**　名詞, 形容詞, 副詞, 動詞は, 各〻常に一定の語尾を有し, それにて品詞の何たるかを一目判然せしむ。即ち
名詞は -o 形容詞は -a 副詞は -e 動詞(不定法)は -i にして, 表にして示せば次の如し。

品詞	語尾	例		
名詞	-o	kolero 怒	lumo 光, 明り	ĝojo 喜び
形容詞	-a	kolera 怒れる	luma 明るき	ĝoja …
副詞	-e	kolere 怒りて	lume 明るく	ĝoje …
動詞(不定法)	-i	koleri 怒る	lumi 照す	ĝoji …

§2) **複數** は男性たると女性たるとを問はず, 全て語尾に -j を附す。

例
クナーボー
knabo 男兒(一人)
クナーボイ
knaboj 男兒達
フロᵒーロー
floro 花(一つ)
フロᵒーロイ
floroj 花(二つ以上)
クナビーノー
knabino 女兒(一人)
クナビーノイ
knabinoj 女兒達

§3) **數に於ける名詞と形容詞の一致**　形容詞が複數の名詞を形容する場合には, その形容詞にも -j を附して數の關係を明かにす。

ボーナー ホーモー
bona homo　よき人
ボーナイ ホーモイ
bonaj homoj　よき人々
ベーラー ドーモー
bela domo　美しい家
ベーライ ドーモイ
belaj domoj　美しい家々

〔比較〕{A) bela domo kaj floro / B) belaj domo kaj floro}

A) の場合に於て形容詞 bela は單に名詞 domo(家)を形容したに過ぎず, B) の場合に於て形容詞 belaj は複數となり居るが故に domo と floro, 即ち二個の名詞を形容せるものであることが分る。

〔備考〕形容詞は名詞の前後いづれに置くも可なり。

例。 belaj domoj＝domoj belaj.

§4) 人稱代名詞		單數		複數	
第一人稱		mi	私	ni	私達
第二人稱		vi (ci)	汝	vi	汝等
第三人稱	男性	li	彼		彼等 それ等
	女性	ŝi	彼女		
	中性	ĝi	それ		
	汎稱	oni	人, 人々, 世の人達, 或人		
	再歸稱	si	自身	si	自身

【註】 ci は佛語の tu に相當し, 極めて親しき者若くは目下の者に向つてのみ用ゆ。 ĝi は佛の ce 英の it の如く無生物の外, 禽獸赤子など, 性の區別し難きものに用ゆ。oni は獨の man 佛の on に相當し漠然と(人)を云ひ現はす。それが用ひ方は後段に致つて詳細に説明す。

§5) **冠詞** は定冠詞 la あるのみにして, 所謂不定冠詞なるものは無し。然して la は名詞の數及び性如何に拘ず絶對不變なり。
例。 la homo, la homoj, la homon,
la homojn.

注意　冠詞無き國語を使用せる國民は, 冠詞の觀念薄きが故に, エス語を使用する

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社會主義評論雜誌

無産階級

六月號

要目

ラッセルと社會主義革命

勞働組合總聯合

資本主義の崩壊と勞働階級（ブハリン）

鐵砲と民

政界の借家難

資本總同盟

ロシアの革命と共産黨（ジノビエフ）

勞農ロシアの新政策と勞働組合の任務

レニンの封印列車

佛蘭西階級闘爭 3（マルクス）

一部三十錢税一錢

東京市外代々幡町幡ケ谷四〇

無産階級社

石川三四郎氏新著

放浪八年記

箱入　布張絹美裝　五百五十頁　定價參圓　送料金十六錢

六版

深刻無比なる歐洲實見記である。著者は革命の志を懷いて故國の天が下に、住ふに地なく着るに衣なく、僅かに歐洲同志の間を縫ふて放浪茲に八年！本書は其の憤怒の涙の痕であり、正義にふるへたる血の迸りとも云へる。收むる處日本の脫走、途上、歐洲大戰、籠城日記、燃ゆる地上、日は未だ出ず以下八篇五百五十頁、犀利にして沈痛、著者の眞生命は悉く本書の中に打込まれたと云つていゝ。『私は何處へ行つても故鄉の如く懷しく亦他鄉の如く寂しい』と。是れコスモポリタンたる著者が人間としての悲痛なる告白である。然も著者は此の間に、兄弟を失ひ、友人を無くし、惡むべき惡魔の數々を見、溫かき知己を見、更に麗しき相互愛を見た。歐洲文明の鳥瞰圖、純眞なる革命家の魂、空前の旅行記として廣く江湖に薦むる。

東京市神田裏神保町六
三德社
振替東京三三〇八一番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◆中元格安反物賣出し（七月一日より十三日迄）

◆夏座敷用品陳列（七月六日より十三日迄）

◆運動展覽會（七月十九日より廿九日迄）

◆旅行用具は三越の品に限ります各種ともお恰好な品が潤澤に揃ふて居ります

商品券　中元御贈答品として便利でよいとて非常に重寶されてゐるのは三越の商品券

中元御贈答品は三越の品

何人にも喜ばれ、何人にも嬉しがられるのは三越の品であります、殊に本年はお恰好品を澤山陳列して御座います

七月の定休日は二十五日だけです、十日はお盆のお買物の爲め休みましては非常にお不便と存じまして七月は休みません

三越呉服店

◆東京駿河町◆

新學藝講座
第一編

文學博士 金子筑水序・平林初之輔著（新刊出來）

科學概論

定價金壹圓　送料金六錢

目次——第一章　科學的眞理——第二章　驗經——第三章　科學の目的——第四章　科學の分類——第五章　科學の方法——第六章　數學と自然科學——第七章　法則と假說——第八章　科學と文明——第九章　科學の價値——第十章　最近科學の概觀——第十一章　相對性原理。

金子博士序　二十世紀新學藝の氣運は今や勃然として大いに起らんとする概がある。故に本講座は常に此の新興の氣運に注目し、凡て舊習舊慣を捨てて、專ら二十世紀新學藝の精神を解說し、咀嚼し、發揮せんことを根本方針とした。

平林氏緒言　本書の目的は、科學とは何ぞやと云ふ問題を一般讀書のために、出來る丈け平易に說明する事にある。私は最初或る一冊の書物を選んでそれを解說的に講述するのが最も安全だと思つたが、適當な書物もなく、且つ極めて難事業であり、就中平易と云ふ第一の目的が到底達せられない事を知つたので、大體に於て二三の書物によりつつ、參考し得るものは悉く參考した。

▽見よ！　最新學藝の知識を大學の講堂及び專門家の研究室より一般知識階級に解放せんとして開設したる『新學藝講座』の第一編今や新裝して市場に出づ！

內容見本・進呈　東京神田表神保町

春秋社

振替東京二四八六一
電話神田二一三八

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

前號目次

勞働祭と巡査（題言）……………

メーデーと無產階級（社論）……………

說明出來ざる事實（小說）　小川　未明

ある機械（小說）……………細井和喜藏

悲慘なる存在（小說）……………村松　正俊

彼の死（小說）……………今野　賢三

瘦せて蒼白い顏をした夫（小說）……………金子　洋文

府中の小農組合動く（評論）……………ペコリンスキー

陶器や天鵞絨はその後（評論）……………原田　邦三

番犬（野外劇）……………赤　箒

編輯後記

いよ〳〵燃える夏に這入つた。夏—何と勇ましい時であらうか！　山が燃える、海が燃える、田舍も都會も、さらに世界の、全民衆の血が燃える。

見よ！今はすでに春ではないのだ、春のなまぬるい時ではないのだ。團結—戰鬪—白熱—血まみれ、あくまで燃えて進む時代が、今眼前に切迫して來た。それを！兄弟よ振ひ立て！

われ等は單なる藝術家でない。過去のすべての約束定義に、たゞ屈服し束縛せられて、常に民衆の外に己れを獨りで居らしめ思想の實現、それへの行爲を無智と恐怖で否定してゐた、所謂藝の藝術家でない。それを！兄弟よ解つて吳れ！

もつと、もつとだ！燃えやう、燃えやう七月、八月いよ〳〵これからといふ眞夏になるんだ。すべてと己を一箇にかためて火玉のやうに燃えあがらう。

定價　一部四拾錢◇半年前金貳圓四拾錢◇一年前金四圓六拾錢御註文はすべて前金のこと◇代金の領收は雜誌發送を以てする◇送料內國壹錢外國四錢

廣告　廣告、廣告料については直接本社へ問合せを乞ふ

宛先　寄贈、通信購讀申込及び送金、其他本誌に關する一切の御用向書籍雜誌等の寄贈は凡て「種蒔き社」宛

締切　每月五日

大正十一年五月廿八日　印刷納本
大正十一年六月一日　發行

東京府下代々木大山千四十四番地
發行人編輯人
印刷人　今野賢三

東京市神田區今川小路一丁目一番地
印刷所　同工社

東京府下代々木大山千四十四番地
發行所　種蒔き社
振替口座東京五九三八七

大賣捌　東京堂　上田屋　北隆館　至誠堂　東海堂

蒔種く人　第二年第二卷第九號　（大正十年十二月一日第三種郵便物認可）　大正十一年五月二十八日印刷納本　大正十一年六月一日發行

本號四十錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

（第三種郵便物認可）　大正十一年六月一日發行

本號四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA